幕末期における民衆の意識と行動

本　山　幸　彦

The Bakumatsu Commoner: Consciousness and Action

MOTOYAMA, YUkihiko

はじめに

戦後の幕末・維新史の研究においては，明治維新変革の歴史的性格を解明する重要な手がかりとして，幕末政治の底辺に位置する民衆の動向が取り上げられ，彼らの意識と行動に，さまざまな解釈と評価が与えられてきた[1]。だが，そこで対象とされたのは，主として幕末の動乱期に急激に増大した農民一揆や，都市民衆の打ちこわしとして現象した彼らの意識と行動だった。たとえば，一揆や打ちこわしに立ち上った民衆が，どの様な革命意識の持主だったのか，また，彼らは封建制の動揺にどの様な主動的な役割を果たしたのか，などという封建制崩壊に対する彼らの主体的なかかわり方が，そこでの問題だった。

たしかに，当時の一揆や打ちこわしの激化と封建制動揺との間に客観的な関係のあることは否定できない。だが，彼らの行動が封建破壊の起爆剤だったというよりも，外圧の衝撃で大きくぐらついた封建権力が民衆生活の安定を破り，彼らをして一揆や打ちこわしに走ることを余儀なくさせ，それが結果的に封建制の動揺に追討をかけたのだと考えるべきだろう。しかも，民衆の一揆や打ちこわしは，彼らの意識に革命性があったか，否かという問題とは，必らずしも関係ないことなのである。

幕末期の民衆の意識が，その日常性において，進歩的あるいは革命的だといわれるほど成長していたと見ることは困難である。幕末期の民衆を考える際の問題は，彼らの意識が革命的だったかどうかという点よりも，むしろ，彼らの意識が革命的，進歩的ではなかったにも拘らず，彼らが上からと外からもたらされた幕末動乱の坩堝に不可避的に投げ込まれ，日常生活を破壊された結果，その意図に反し，非日常的な集団活動に走らざるをえず，その意識も非日常化せざるをえなかったその過程の解明にこそあるのではなかろうか。

変革期に生きる民衆の意識は，彼らの日常的な生活意識が破壊されるなかから生れてくるといわねばならない。かつての幕末期民衆の研究が，民衆の日常性から切りはなされた一揆や打ちこわしという非日常的な活動のみを取り上げてきたことに鑑み，小稿では，嘉永6（1853）年のペリー来航から，慶応4（1868）年1月3日の鳥羽・伏見の戦争勃発までという幕末政局が最も苛烈だった15年間を生きた民衆の意識と行動の変貌，つまり，この間の民衆の日常性から非日常性への転換を，政局の展開過程と関連させながら，やや具体的に考えてみたいのである。

換言すれば，政治的な激動と，それが惹起した社会的，経済的な諸情勢の変動の振幅が，民衆の日常生活と意識の限界を破ったとき，民衆の日常性はどのように変化し，彼らは彼らの日常的

な安定性を破壊した政治勢力や政治情勢に対して，どのような態度をとるのかという問題，いわば問題は政治的動乱のなかに揺れ動く民衆の生活軌跡の解明にあるといっていい。

幕末期民衆の日常的な意識が，いかに非日常化したかを知る一つの指標として，民衆にとって絶対不可侵の権威だった幕府＝公儀の「御威光」に対する彼らの認識の変化が想定されよう。公儀の「御威光」が政局の変動に翻弄されつつ，漸次その栄光を失っていった過程に照応して，民衆の公儀に対する態度，認識は大きく変っていく。民衆の意識は自らの安全を托していた権威が，もはや権威でなくなったときいろいろな形態をとって非日常化していかざるをえないのである。

そこで，小稿では，公儀の「御威光」の変化を，民衆意識の変容を測る指標とし，幕府権力の低下を尺度に，幕末期の15ケ年を三つの時期に区分し，それぞれの時期における幕府の状態と民衆の動向との照応関係を明らかにするという方法を取りたいと思う。

第一期は嘉永6年のペリー来航を契機に，幕府がその独裁政治を自ら否定し，幕末政局の展開に道を開いた時期。つまり，嘉永6年から安政5（1858）年の日米通商条約の調印をへて，万延元（1860）年，幕府権力を代表する大老井伊直弼が暗殺された桜田門外の変までの8年間である。

第二期は大老という中心を失った幕府政治に，薩摩，長州，土佐など西南の雄藩が干渉し，国事周旋と称して中央政界に乗り出すとともに，京都では，尊攘激派が朝廷の権威を背景に中央政局に介入して幕府に攘夷の実践を要求し，対外問題が複雑化するなど，幕府権力の動揺が激しくなる時期。つまり，文久年間（1861-1863）の公武合体運動から尊攘激派の抬頭をへて，元治元（1864）年8月の第一次長州征伐とその終結までの4年間である。

第三期は慶応元（1865）年5月の第二次長州征伐に始まり，幕府の敗北，フランスの指導による徳川慶喜の幕政改革，それに対抗する薩長連合の成立と薩長の討幕計画，それに続く大政奉還，王政復古の大号令をへて慶応4（1868）年の鳥羽，伏見の戦争の勃発など，幕府大詰の4年間である。

この15年間，旧権力は衰退から滅亡に向い，新権力はまだ成長せず，旧権力の壊滅にいたっても，新権力はまだ不安定だった。民衆はつねに戦争の危機に晒され，さらに海外貿易による伝統的経済の攪乱でその生活難は深刻化し，自らの安全を保証してくれるいかなる政治勢力も存在しない状況に放置され，自らが自らを守る必要性から，その意識も行動も非日常化せざるをえなかったのである。一揆や打ちこわしは時代が進むに従って激しくなり，ついに，幕府の大詰のとき「エエジャナイカ」の大衆乱舞が東海や中部以西に拡がったのは，民衆が非日常化した最も具体的な現われだった。

ところで，ここでいう民衆とは被治者階級一般，農，工，商の身分に属する人々のことであるが，このような民衆の意識と行動は，何によって把えればいいのだろうか。彼らの行動に関しては，諸藩の情勢探索書や情報書翰がそれを伝えてくれるから，その輪郭を知ることができる。だが，自らの考えを記録に残すことの少い一般の人々の意識を，直接的に教えてくれる史料は皆無に近いといっていい。それゆえ，何らかの間接的な史料を媒介に，民衆の意識を推測する以外，それを知る方法はないといわねばならない。

そこで，小稿では間接史料として諸藩の探索書翰，それに「諷刺的意味を含んで，当時の政治や風俗や社会万般の出来事を遠慮もなく，摘発している所の所謂天意人言」（明治38. 9，啓成社刊；桜木章『側面観幕末史』；4頁。以下『幕末史』と略称）ともいうべき落書や酒落（シャレ）歌を使

用した。これら落書類はその作者は民衆ではなかろうが，街頭に張り出されたり，一枚摺として市中に散布され，民衆を代弁してその不平，不満を訴えた世論だった[2)]。

しかし，たとえ間接史料にせよ，幕末期の書翰や風刺を全国的な規模で求めることは，今や不可能に近い。従って，今回は主として幕末政局の中心だった京都，江戸，大阪などで流布された史料から窺える民衆の意識と行動に限定せざるをえなかった。

第一期　幕府権力相対化の時期

この時期の最大の事件は，何といっても突如として浦賀沖にその巨姿を現わしたペリーの艦隊の来航である。民衆にとってペリー艦隊の出現は，政治，外交の大問題というよりも，自然の脅威にも似た大事件であり，しかも，彼らの内に閉ざされた伝統的な意識が，外に向って開かれる日まで，彼らに非日常化を強制し続ける事件だった。

ペリー来航当日の江戸の情況は，『続泰平年表』に次のように語られている。

> 浦賀諸家の陣屋より昼夜を分たず，注進の汗馬，海陸飛脚の往来，櫛歯を挽よりも忙かはしく，江戸の大都繁華の巷も俄に修羅の衢に変じ，万の武器調度を持運び，市中古着商ふ家には陣羽織，小袴付，簑笠等をかけならべ，鍛冶を業とする者は，家毎に甲冑刀槍を鍛ひ，武器商ふ店には，古き武器を累ねて，其価平時に倍せり，海辺に家宅ある士民老幼婦女の立退かんとて，家財雑具を持運ふ様，さしもにひろき府下の街衢も，奔走狼狽して，錐を立つべき処もなし，訛言随て沸騰し，人心恟々として定らず(『幕末史』，14頁以下)。

江戸の民衆は何よりも戦争の勃発を憂いたが，同時に公儀の武士たちが，彼らを脅かす異国艦隊を打ち払ってくれることを期待していた。民衆の伝統的な武士観によれば，武士はそうすべきものだった。民衆の間では，「下様の寄るもさわるも打払，早半鐘のいまかいまかと」（同上，14頁）と歌われる様な切迫感が高まっていた。彼らは武士を信頼していたのである。

民衆は無理をしていざという時に備え，米を買占めた。そのため米価はじめ諸物価は急騰し，アッという間に，生活難が江戸の民衆に襲い掛ってきたのである。ただ，武具屋や馬具屋だけが，目前の利益を喜び，「武具馬具屋渡人さまとそつといひ」（同上，16頁）などと川柳で茶化されていた。

だが，武士たち，なかでも公儀の直参に托した打ち払いを願う民衆の夢は，間もなく淡雪の様に消え去った。ペリー艦隊が下田に停泊していたわずか10日間に起ったアメリカ水兵の乱暴に対する公儀役人の処置，たとえば久里浜に上陸したアメリカ水兵の農家の娘に対する暴行事件にしめされた役人の処置は，民衆に公儀への軽侮の念を植え付けるに充分なものだった。役人の処置は以下の如きものである。

すなわち，暴行を受けた娘の父が久里浜役所にアメリカ水兵の処分を訴えて出た時，役人は「此度渡来の異国船の儀彼方より何様の事致候とも此方にて聊差構申間敷旨滞船中度々の御沙汰有」（嘉永6.6.12，『嘉永明治年間録』巻2上，18頁裏。以下『年間録』と略称）という幕府の基本方針に従い，ただ堪忍せよと諭し，慰謝料若干を農民に与えたにすぎないというものだった。

嘉永6年6月12日，ペリーは明春の再来を約して去った。しかし，民衆は安心できなかった。なぜなら，幕府が次々と公布した布令は，来年の決戦を思わせるものばかりだったからである。民衆の生活にとってきびしい事態は，むしろここから始まったといえる。

ペリーが退去して10日目，幕府は品川湾に11ヶ所の砲台を築く決議をし，7月1日には，伝統的な独裁を自ら破って諸大名に開国鎖国の意見を諮問し，9月15日には，これまた祖法を捨てて大船建造の禁を解き，26日には，江戸海岸に藩邸をもつ諸藩に砲台築造を命じたのである。

江戸の町人が初めて海防献金を課せられたのは，11月6日だった。また，9月のはじめ，幕府は直参に金を貸しつけ，武具一式整備することを命じたが，彼らが武具を完備するには，その貸付金だけでは足らず，残余はすべて知行地の農民の膏血で賄わなければならなかった。或る情報書翰は次のようにいう。

今度御貸付金武器調度の御趣意依之近々御旗本の面々甲冑馬具等の御調可有之迚労心のよし……凡其入費ハ各采地村民膏血を絞るにいたるといふ（嘉永6.9，『年間録』巻2下，18頁裏）。

この時期以後，江戸，大阪の町人にはしばしば海防費上納が命じられ，江戸湾防禦の諸藩の領民も，藩から海防費を徴収された。

明けて安政元（1854）年正月，約束に従ってペリーは軍艦7隻を率いてやって来た。幕府は3月3日にペリーと和親条約を結んで下田，箱館の二港を開き，8月23日にはイギリスと，9月2日にはオランダと，10月21日にはロシアと，それぞれ和親条約を締結した。民衆の武士にいだいていた幻想は，これで全く消滅したといっていい。

「なんのその男ははだか百貫で，よろいいらずに向ふ鉢巻き」（『幕末史』，78頁）。危機に当って，武士に頼れぬ民衆のいらだつ心を，この狂歌は見事に表現している。民衆のいらだちは，精神異常者をつくりさえしたのである。諸外国から和親条約を強制的に締結させられたことを聞き，自ら攘夷を引き受けると江戸城に乗り込んできた易者がそれである（安政1.3.17，『年間録』巻3，18頁裏）。外圧に際し，日常的には武士以外に頼るものを知らなかった民衆が，頼るべきものを失い，時局の重圧に押しつぶされた憐れな姿を，この易者は象徴していた。

民衆の反感は直ちに老中首坐の阿部伊勢守正弘や幕閣に向けられた。「阿部川はきなこをやめてみそをつけ」（『幕末史』，56頁），或は「いにしへは伊勢を恐るる唐人も，今は阿部こべ伊勢かおそるる」（同上，57頁）と阿部は冷笑され，幕閣も次の様な「ちよぼくれ」で嘲笑されたのだった。

やんれやんれ騒動出来たよ，抑世上の噂を聞なよ，先年此方唐人さわぎて，交易々々其時次第ののらりくらりの返事をする故，いよいよ図に乗り，蒸気船とは茶にしたアメリカ，呑れた阿部さん，困った戸田さん（老中戸田忠温）……文武々々と今更さわいて，蜂にちんぼうさされた同然，いたいといわれず，かいい所へ届く手当はお金が第一，やれやれ伊勢さんどうした物だよ，叱りちらした御隠居（水戸斉昭）なんそを引つり出しても，能手（ノウイテ）があるかへ（同上，86頁）。

ペリーのさわぎで民衆を襲った不況と不安は，安政元年春の「当寅春新撰之苗」という落書となって民衆の口の端にのぼったのである。

去年の秋から気がはれ苗，年が明而も春めか苗，梅が咲ても見てが苗，今年のはつ午賑やは苗，ゆづうの苗，に仕様が苗，吉原此節御客が苗，芝居見物いりが苗，芸人残らず暮され苗，火事沙汰苗，普請が苗，寓人足は喰れなひ，職人ないてもおつっか苗，……質やはかさ苗，請ても苗，お米か上って下ら苗，両替やには銭か苗，今度の壱朱は目方か苗，芝，日本橋でも看か苗（同上，84頁）。

民衆はこんな不景気の根源が，すべてアメリカの来航と，民衆から軍費を召し上げながら，何ら異船に対処する実力をもたぬ武士たちにあることを知っていた。この年（1854）の11月27日，

安政改元の宣下があったが，民衆は安き政治を期待しなかった。「あんせいを下からよめはいせんにて，残る一字はアメリカの国」（同上，109頁）。武士が立ち直り，異船の恐怖が去らぬ限り，民衆にとって安政はなかったといわねばならない。安政は民衆にとって「闇政」（同上，209頁）だったのである。

民衆が不安な年を送ろうとしていた12月22日，水戸斉昭の献策に従った「毀鐘鋳砲」を命ずる太政官符が朝廷から幕府に降り，幕府は翌安政2（1855）年3月，この朝旨を諸藩に伝えた。江戸民衆の眼前に，朝廷の姿が初めてクローズアップされてきた。しかし，民衆の日常的な意識からすれば，朝廷への尊敬よりも，神仏の鐘をつぶす恐ろしさが先に立ち，攘夷の本家水戸の隠居に対する不信感が昂じていった。この年，10月2日，江戸は大地震に見舞われた。藤田東湖を圧殺したあの大地震である。民衆はこれに神罰を見たのだった。

> ヤレヤレ水戸さん聞てもくんなよ，今度の地震もお前のおかげで，花の御江戸をやたらに倹約，さやとちりめん，茶やに煙草や，留守居の寄合決てならぬの，御寺や諸山の釣鐘半鐘を鉄砲に鋳立るなんのかのとて，騒ぎのひどさに，神々様にも出雲の御国へお立ちの御留守に，こんな地震が有といふのも，やつぱり神罰，ヤレヤレ水戸さん胸に手を当，とつくり思索をしなけりやなるまい（同上，124頁）。

安政2年6月，幕府は直参や諸藩に洋式調練を命じ，3年3月12日，駒場で最初の調練を実施したが，これまた民衆の嘲笑を買った。幕府が講武所を設けたのも3年の4月だった。7月3日にはハリスが総領事として下田に着任，10月17日には，老中首坐の堀田正睦が外国掛専任を命じられた。アメリカ総領事の来任は，表面武備を固めつつも，幕府の本心が外国交際の永続にあることを民衆に予想させ，過き去ったよき日が，もはや帰らぬものだという絶望感を民衆に味あわせた。今こそ，幕府の祖法＝「日光様の掟」が民衆にも回想されてくる。

> コウどいつらもこひつらも，耳の穴を明て，能く聞やァがれ，勿体なくも忝くも，日光様の掟を破り，此頃はとほうもねへ，西洋調練なんぞで，神国に生れながら，畜生国の真似をいい事にしてしやァがると，夫を上に居る馬鹿らがほめると，又いい事として大べらぼうめが，やみと畜生国と阿部こべになると知らねへ（同上，169頁）。

西洋式の調練は，民衆にとって古く善きものの崩壊の象徴にほかならなかった。

江戸でこんな落書が流布していた頃，下田のハリスは江戸入りを強硬に要求し，堀田は外国奉行岩瀬忠震らとともに，ハリスの入府を許すべきだと閣議で主張していた。安政4（1857）年10月21日，堀田はハリスを江戸城に迎えて将軍に謁見させ，12月に入ると岩瀬忠震，井上清直の両名を全権に任じ，ハリスと通商条約の草案を議せしめ，12月24日には，林大学頭らを上洛させ，条約調印の勅許を朝廷に要請したのだった。

だが，本能的に西洋嫌の朝廷は，断然条約締結不許可の裁定を下す腹だった。これを知った堀田は翌安政5（1857）年1月8日，自ら上京して勅許獲得を工作し，九条，鷹司など名門公卿の抱き込みには成功したが，三条，岩倉ら少壮公卿の反撃に会い，結局，失敗したのだった。林や堀田の失敗を喜ぶ京都民衆の意識は，「東からはやし（林）立てられ登りつつ，公卿に蹴られて耻を大がく（学）」（同上，215頁），「ごうけつと林たてられ京へ来て，大きな恥を大学の守（カミ）」（同上，215頁），あるいは，「いちはやく大学殿は穴をあけ，堀田おかれぬこのたびのしぎ」（同上，251頁）など狂歌に見られよう。それはまた江戸民衆のものでもあった。

その頃，条約勅許問題とならんで将軍継嗣問題が幕閣と雄藩大名との間で論じられ，時局の中

心課題となっていたが，京都においても，江戸にあっても，民衆にとってそれはどうでもいいことだった。民衆はひたすら外国とかかわりのなかった古き善き時代の復活を望んでいたのである。「すつぱりとおもひ切ておしまひよ。交易」（同上，237頁），「早くお帰りよ。亜墨利加船」（同上，237頁），こんな落書が書かれたのもそのためである。アメリカとの交際が続く限り，誰が将軍になろうと民衆の生活に変りはなかった。

安政4年の春にはやった「苗売」という酒落文は，そんな民衆の気持をうまく言い現わしていた。

……畜生登城ためしがない，こんな無法を留てがない……芝居の普請まだ出来ない，よせやみせもの入がない，遊女屋すべて客がない，何商売も買人がない，花見遊山に出てがない，なんだか少しも春めかない，料理屋吉原どんな客でもそらさない，質に具足をまだとらない，西洋流はまだやめさせない，異国の取沙汰まだやまない，……日本兎角おあぶない……なぜ世の中はつまらない，思ひ出せば気がきかない，刀はあれども短くない，其癖脇差長くない，見かけばかりじやつまらない，神の御罰は仕方がない（同上，239頁）。

江戸に沈滞と不況をもたらしたのは，幕府の対外政策の失敗である。これに鉄槌を下したのが朝廷だった。通商条約を阻止した朝廷に，江戸の民衆も拍手を送った。鎖国復帰の希望も出てきたのだった。

公家起るアメリカほこる世の中に
　なにとて公方ちゑなかるらん。
しんくして堀田かひなし唐井戸へ
　雲の上人はまりこまねば。
九重の花を東へ匂をはせて
　佐倉は春のくれにちるらん（同上，252頁）。

「佐倉（堀田正睦）は春のくれにちるらん」と予言された堀田は，幕府独裁の復活をめざす彦根藩主井伊直弼の大老就任（安政5.4.23）によって，その影がうすくなり，六月には罷免された。思いがけず出現した大老という幕府非常時の大官は，江戸の民衆に新鮮な政治を期待させたのだった。

世の中井伊尽し

外国貿易せぬか井伊。叡慮もちつとは立てるか井伊。水戸の隠居は殺すか井伊。越前やつぱり半知か井伊。……薩摩の家格は上ケぬか井伊。西洋さつはり止るか井伊。堀田は其儘置かぬか井伊。諸色の直段は下るか井伊……人気を和順にするか井伊（同上，264頁以下）。

民衆が井伊の手腕に托した希望は，伝統的な祖法への復帰，日常性の回復だった。井伊への期待は民衆の中から，彼の登城を待ちうけて駕籠訴をし，攘夷の軍隊に参加したいと願う古道具屋を出現させた。井伊こそ，攘夷を断行する人物だと，世間で思われていたからである。

私先祖より代々砲術の儀は稲富流並合薬製法仕り候に付……私儀軽き身分柄には候得共万一御場合に至り候はば粉骨粋身命を捨御忠節を尽し可申心底に御座候間西洋流砲術御打合にも相成候節何卒格別の思召を以て其節の御人数へ御差加へ御遣被下候はば難有仕合奉存候

浅草並木町長七郎店　八五郎（安政5.5.12，『年間録』巻7上，21頁裏）。

これがその嘆願書だった。

だが，井伊は民衆の期待を見事に裏切り，天皇の意志を無視して安政5年6月19日，正式にアメリカと貿易を約束する条約（日米修好通商条約および貿易章程）を取り決めたのである。それだけに，井伊を信じようとしていた民衆の失望は大きかった。それに加えて将軍家定の命を奪った（安政5.7.6，家定没）と取り沙汰された暴瀉病いまのコレラが流行し，江戸市中の死者28000人という惨状を呈した。魚を恐れた民衆は鶏卵，野菜のみを求め，それに応じて副食品の価が急激に高くなってきた。井伊は「世直し」どころか，まさに疫病神となった。昨日の賛美は，たちまち今日の罵倒にかわったのである。次の「ちよぼくれ」がそれをしめしている。

やれやれ今度の調印きひてくやしい，六月中には合衆国から二艘の蒸気が下田の湊へ着くとすぐさま，官吏が飛乗り，……官吏（アメリカの）がいふにはエギリス，フランス，支那に打勝，数百の軍艦勢ひ強大，今に渡来し願書を差出しお聞でなければすぐさま戦争，左様になつては御為におわるい，わっちにまかして調印なさつて御渡なされば，わるくはしなひとおどして，すかしてだましにのせられ，……国のおためや君の御為をおもふ御人はひとりもねいかい，ものけつらでは政事は出来ぬぞ，オラガやうなるいやしいものでも，今度の調印くやしくおもふに，慶長このかた大録領して妻子を安楽衣食にことたり，十分おごつて安く暮した御恩を思へば，国の御ためや君の御為に死る命はなんでもないのに，夫を惜て異人にへつらい，機嫌とりとり調印するのは不忠であろふか，不届だろうか，今と成ては応接役人首を切てもおつくものかへ，……なぜに御隠居だまつておひでだ，日本国中おまへ一人を力とおもへば，早く出かけて手際の所望をたのみますぞい（『幕末史』，267頁以下）。

かつて，軍備のため倹約を主張して江戸を不況にし，「毀鐘鋳砲」を朝廷に入れ知恵して神罰の大地震を招いたと，強く非難していた水戸の隠居に対してさえ，民衆は今となっては頼らざるをえなかった。地震よりも貧乏よりも，何よりも異国との交際の永続を嫌悪したのが民衆だった。

水戸の隠居はいわれなくとも黙ってはいなかった。安政5年6月24日，斉昭，慶篤ら水戸の父子は，尾張慶恕，一橋慶喜，越前慶永らと不時登城を断行し，井伊直弼に違勅調印の責任を追及した。しかし，結果は安政大獄の端を開らくことになる彼らに対する井伊の弾圧だった。

江戸ではこの調印で貿易が拡大するのをあてこんだ奸商によって，輸出の対象となる生活物質が買占められ，日用品が欠乏し物価が上昇した。反物，油，雑穀，生糸，蠟などいわゆる五品は，生産地の商人たちが，ひそかに開港場に直送し，江戸には入ってこないという事態も起った。生活難に苦しむ民衆は，その根源である貿易を押しつけた外国に怨をいだき，往来を通行する外国人に投石するものも数多く出る有様だった。幕府は安政6（1859）年8月，早速これを禁ずる布令を出したが，効果のほどは不明である。

外国人に対する嫌悪の情は，新吉原の遊女にまで浸透した。

桜木ハ江戸新吉原の娼婦なり是年八月墨夷某これを聘す桜木斥けて応せず夷望みを欠く而して執政某に語る執政某夷意を重んじ意を其主に属す桜木固く聴かず国風を詠じて其意を述ぶ。

露をたにいとふやまとの女郎花

ふるあめりかに袖はぬらさし（安政6.8，『年間録』巻8，13頁裏）。

民衆を裏切った井伊は，遂に万延元（1860）年3月，桜田門外で水戸の浪士により，登城の途中刺殺された。民衆がこれに大喝采を送ったとしても無理はなかった。

……彦根の主しか大老職をは勤て以来，掟はまもらす，家中はきまらす……先祖か御役を勤た通りに守れはよけれと，嫌ひな人をは残らすほり投，いかなるあほふのよんしり者ても，御加増させたり，任官さ

せたり，……夷国の畜生師匠と頼んて，大名旗本西洋流儀の軍学調練，見付々々の備の鉄砲，西洋筒にて餝る抔とは，片腹痛ゐそ……，其上第一是までゆるさぬ畜生同前夷人の奴原御城へ入たて，眼前穢れて焼たじやないかへ，夷人に対して返答出来ない腰抜者ゆゑ，夷人の奴原追々増長，……桜田門外大変騒動，大名旗本俄に腰抜け，町人商人きも玉失ひ，大老亡ひて御米も少しは相場か下つて，下モ下モちつとは元気が能くつて，天気も漸々此頃直つて，年号万延改元ゴザシテ，是から追々世直し々々し(『幕末史』，299頁以下)。

嘉永以来の幕府の政策のほとんどすべてが，井伊の責任として責められているのが，この「ちよぼくれ」の特色である。非難の焦点は，鎖国という祖法を井伊が公然と破ったことにあった。民衆の意識は一般に保守的で，伝統的な祖法の回復こそが最も望まれ，かつ，民衆が井伊に求めたのもそれだった。井伊の死は，彼が「先祖が御役を勤めた通りに守ら」なかったことに対する権現様の「天罰」と考えられたのである。このことは別の「ちよぼくれ」で，「……いわずと知れてる天罰なるぞへ，流石に御先祖権現様丈，お家を守って下さる印か」（同上，310頁）と歌われていることから知られる。

井伊の横死で混乱した万延元年も終り，文久元（1861）年を迎え，幕府の権力は老中安藤正信に集中した。安藤は違勅調印，安政大獄以来きびしくなってきた朝・幕の摩察を緩和しようと，翌文久2（1862）年2月には孝明天皇の妹和宮と将軍家茂との婚儀を実現するなど，公武合体策をとり政局の安定を図ろうとした。しかし，さきに井伊が大老に就任した時はこれを歓迎した民衆も，安藤が老中首坐として幕政を担当した時には，初から激しい非難でこれを迎えたのだった。

ヤレヤレいわずとよけれど，安公なんぞは，どふしたものだよ，こんなにつまつた世上の騒動しらずにいるかへ，善吉なんぞのかかァをぬすんで，身分に過たるめかけを大勢かかへて，のらくら夷人がこわくて，およくが深よ，おく病ばかりて，えびすのまねして，政事をするので，諸色が高くて諸人が必死で，夷人がいばつて，忠臣怒て，一揆がおこつて，役人のろまで，世間にくらくて，賄ろをとり込，お金をこせへて，奥向いぢつて，金銀なんぞで，女中をだまして，……宮様なんぞの，奥様うばつて，聟さまきどりで，京都のおかげで，大名をさへて，おく病だらだら，暮そおなんぞと，いふ気であろふが，それではすむめへ（同上，360頁）。

こうした「ちよぼくれ」は，幕閣がいかに変ろうと，明るくならない未来を予想せざるをえない江戸民衆の声だったのである。

第二期　幕府権力動揺の時期

この時期の幕府権力の動揺は，何よりも薩，長，土など西南雄藩の中央政界への進出と，幕政への介入，朝廷を擁した尊攘派の外国人へのテロ行為や，攘夷運動を名とする幕政干渉にその原因があった。井伊の刺殺が新らしい政治勢力の出現を容易にしたのはいうまでもあるまい。

この時期の民衆は，前期に始まった対外貿易が，彼らの生活に深刻な影響を及ぼしたこと，尊攘派のいわゆる攘夷実践（外国人の殺傷）の頻発によって前期以上に対外危機が激化し，民衆により強い心理的な圧迫を与えたこと，尊攘派の名声が高まるとともに，その名をかたる偽浪士の横行も盛んになり，江戸や京都の民衆に対する暴力沙汰も多発してきたことなどによって，前期以上にその生活は危険になっていった。

こうした情況の変化にともない，民衆の意識も非日常化する。つまり，民衆は公儀の代りに公

武合体派の雄藩や，尊攘の激派など新らしい政治勢力に「世直し」を求め，幕府への不信感を高めていくのがその現れである。「今年一はい此ままおゐては，今に見なせへ，大事がおこるぞ，早く了簡とつくりさだめて，水戸と薩摩を神にあがめて，いよいよ御武運長久万民けらく（快楽）を御願なされよ」（『幕末史』，362頁）と，幕府に忠告する「ちよぼくれ」も江戸の町に現われた。民衆は安藤を忌避し，水戸や薩摩と提携して善政を施す幕閣の出現を待ち望んでいたのである。

民衆が現幕閣を見放そうとしていた文久元（1861）年5月，長州藩では長井雅楽が藩主の意を体し，「航海遠略」策を引っさげて上京，開国政策をもって朝幕間の周旋に乗り出していた。しかし，当の幕府では，安藤が和宮降嫁の責を問われ，坂下門外で尊攘の激派に要撃された。安藤は死はまぬがれたが，その政治生命を失ったのだった。

この年，京都でも幕府の人気は急速に降っていた。それは前年御所から京都民衆に金一封が下賜されたことに幕府が反対し，これを返上させたからだった（『官武通紀』第1冊，巻1，2頁）。幕府に対する民衆の怨嗟が高まったのも無理はない。そこへ，薩摩藩主島津忠義の実父久光が，自ら手兵1000名を率い，堂々と上京してきた。長州の中央進出に刺激されたからである。文久2（1862）年4月のことだった。だが，島津の上京は，そのはじめ大きな不安を京都の民衆に与えていた。或る探索書はこう報じている。

> 一京師表，過る十五日夜中より大変之儀御座候，島津和泉殿大人数にて大坂表へ参着，夫より上京相成候に付，伏見表へ無案内御入込被成候由，……其子細は相分兼候得共，風唱には，勅諚を受外国人打払可申と之由に御座候。……総人数大坂に被居候分一万五千計，伏見表には五六千，京都にも千人余之由，……所司代は大に恐怖之様子にて，十五日杯は具足を着し相堅め候由，……女中子供等は何方へ敗退散仕候由に相見得，其騒動実に大変之事にて，市中商売も相休候様に御座候，右に付物価之高直可申様無御座候（同上第1冊，巻5，134頁以下）。

しかし，島津はたくみに京都の民心をつかんだ。島津は藩兵の屯所に，時価の二倍で町家を買収したり，京都の米にはただの一合も手をつけず，逆に国許から持参した米を放出して米価を引き下げた（『採襍録』第1冊，巻9，324頁以下）。藩士たちにも厳格な対民衆軍規を設け，民衆に対して「万事手厚，至て穏に」（『官武通紀』第1冊，巻5，146頁）振舞わせるなど，細かいことに気を配っていた。幕府の無情を恨んでいた民心に，これが受けないはずはなかった。

> 右様之所置有之候て，人心帰服致し，洛中洛外は不及申，畿内近国迄も薩州様之御蔭にて世が直り，夷船は打払に成，諸式は下直に成杯申居候由，都田舎共諸民之気憤発致し，薩州様ならば一命は少しも不惜と申，至て平穏人気沈静也，……都ての所置無抜目行届申候に付，薩州大明神などと衆人申居候なり（同上第1冊，巻5，147頁）。

島津の人気は，狂歌や落書にも現われた。「大平をこき出すものは薩摩いも，はらのぐわいもなほる下々」（『幕末史』，381頁），「薩摩からくつわの虫がとんできて，跡ぞ治る武蔵さわがし」（同上，381頁）などがそれである。島津はこうした京都民衆の人気を背後に，文久2年5月には勅使大原重徳を擁し，幕府に幕政改革を実施させるべく，勅命を奉じて江戸に降った。

薩摩人気の上昇に反し，所司代酒井若狭守の人望はガタ落ちとなり，落首などでもさんざん叩かれていた。「皆人が若狭小鯛にあてられて，大原下り跡かよかろう」（同上，387頁），「若狭さん何をぐづぐづしてござる，伯耆（箒）たてたらちやと御帰り」（同上，387頁）。若狭守は6

月に職を免ぜられ，松平伯耆守がこれに代った。しかし，朝廷はこれを拒否し，幕府は姫路藩主酒井忠績に所司代の代勤を命じたのである。

6月7日，江戸に到着した島津久光は，将軍上洛，五大老職設置，一橋慶喜を後見職，松平春嶽を政治総裁職に任ずるといういわゆる三大策を幕府に要求。幕府はその三策のうち，慶喜の後見職，春嶽の総裁職就任という一策を容れ，翌7月にこれを実現した。幕閣に入った春嶽は以後薩摩，水戸など雄藩の意向をいれて幕政改革に乗り出すことになる。春嶽は，当初，「賢しな越路の風の福井より，治りなひく四方の民草」（同上，408頁）と期待をもって迎えられた。

春嶽の改革は，安政大獄責任者の処罰，安藤ら和宮降嫁当事者の蟄居，農民や町人の自由営業をさまたげていた幕府の国益改所の廃止，参覲交替制の緩和などであった。このうち，江戸の町人を喜ばせたのは，国益改所の廃止だったが，参覲の緩和は，江戸の滅亡に等しい印象を民衆に与えるものだった。参覲の緩和が江戸の町人に与えた打撃について，文久2年8月の探索書は次の様に伝えている。

今般御改革ニ付……諸家様奥方始メ家中迄妻子供国元江引取可申旨御内意有之候由尤諸家様三年五年又は七年御暇ニ相成江戸表ハ百日之御機嫌伺ひと申事に御座候如此ニ而ハ花之江戸と申事も田舎同様之姿ニ御座候誠ニ以古今珍敷事に御座候（『東西評林』第1冊，巻3，380頁）。

また，文久2年9月の或る書翰も，「町人ハ皆枯腹いたし候迚歎居何れの町を通りても此（参覲緩和）歎息咄のミ」（同上第1冊，巻3，433頁）と江戸の不況を記していた。最初の期待に反してこの不人気な改革を断行した春嶽は，今度は民衆からこっぴどく非難され，様々な川柳，狂歌で嘲笑された。この年10月の或情報書翰はこう述べている。

シユンガク（嶽）の山がくづれてカト（門）が付く（獄門）。雑菜（総裁）で一（越）ぜんめしもくハれ子イ。町々の評判ハ至而悪しく其外之所ハ不相分此節暫御引篭登城無之（同上第2冊，巻4，139頁）。

また，同じ頃の狂歌に，「春嶽と按摩の様な名を付て，上をもんだり下をもんだり」（同上第1冊，巻3，381頁），「一膳（越前）で置けばよいのに二膳目を，総裁職（惣菜食）で位過たり」（『幕末史』，339頁）などというのもある。

民衆の春嶽への怒りは，春嶽の改革が祖法破壊だという点にも向けられた。民衆に対する非日常化の強制への憤りであったのである。

ヤレヤレ抑当時の変風聞てもくんねへ，去年此方按摩が出かけて……日光の親父が食や食ずで折角集た国持大名，家内の者迄御国へ帰させ，馬鹿けた御政事，江戸へおくのは若も大名謀反を仕た時，人質同様の手立の事ては有てはなへかい，万一きやつらが内証で在所へ逃ない為迚，拵置たる御関所，是から何の為にもならない物たよ，昔の風をはからりと変して，御旗中へも兵賦を出せとはあきれた噺だ（『幕末史』，465頁）。

そして，民衆の物心両面の貧困感は，この年晩秋の「新板ないもの尽し上」という酒落文となって現われた。

さてもないないないものづくし。天下太平へんがない。……職人このセつ仕事がない。あきんどなんだかもうからない。其くせからだにひまかない。元が高くて仕方がない。しまつをするよりしかたない。炭薪上つて安くない。ゆやのねあげもむりハない。大銭小銭たんとない……お酒も高くて呑れない。のんでもサツはりききがない。其くせはかりにまけがない。どぶろく酒でもむまくない（文久2．11，『東西評林』第2冊，巻5，256頁以下）。

まさに暗い世相を反映して，酒を飲んでも酔えない民衆の意識を，この「ちよぼくれ」から察することが出来よう。

この様に，やがて江戸の民衆に嫌われることになる春嶽を幕府の中心に据えた当の島津久光は，大原重徳と前後して文久2年8月21日江戸を出発，途中生麦村で藩士の制止を聞かず行列を横切ったイギリス人を無礼打ちにし，閏8月7日，意気揚々と京都に引き上げてきた。だが，彼を迎えた京都の政局は一変していたのである。

京都では薩摩の幕政改革を手ぬるしとする長州藩の尊攘派が抬頭し，彼らは開国政策をもって朝幕を周旋した長井雅楽に詰め腹を切らせ，少壮過激の公卿三条実美や姉小路公知らをかついで政局を左右していた。長州藩では藩論を「航海遠略」から「即今攘夷」に一変し，世子毛利定宏は兵を率いて上京，安政大獄で処刑された有志の特赦を幕府に命ずる勅旨をもって江戸に下向した。8月24日，定宏は久光の江戸出発と入れ違いに江戸に到着したのである。

京都に着いた久光は閏8月23日，形勢利あらずとみ，尊攘派を批判する建議を残して帰国した。さらに毛利が江戸へ，島津が国許へ去った後の京都へは，安藤失脚の後，藩内の公武合体派を抑えて勢力を握った土佐藩の尊攘派が藩主を載いて上京する。そして，彼らは攘夷の実践を幕府に督促するため，勅使三条，姉小路を奉じ，文久2年10月28日江戸に降ったのだった。この月の12日，朝廷内部に国事御用掛が設置され，尊攘激派の拠点として攘夷，倒幕運動の策源地となる。

激しい諸藩主の出入り，尊攘派の策動などで，にわかに全国的な政治の中心地となった京都，その京都の民衆の意識は，さし当り，次の「ちよぼくれ」に見られよう。

> 是れ々れ皆さん聞てもくんなひ，世間世上は御武家の世の中，京都なんとは建ふと寝かそと，気儘のものだと思ふていたのに，何を聞いたか今度の○○（親玉）たいそふりきむぜ，西の果からくつ輪の親分，二の丸住居の御礼と名をつけ，のかのか出かける……その内長門のむすこか出て来て，諸国国司が追々来るげな，今にいくさの起て来るとて，町屋やしきはワヤワヤゴテゴテ手前勝手の御咄し計りで，おかしな世界だ（『幕末史』，411頁）。

島津が江戸へ去った後の京都では，民衆を不安がらせるいろいろな噂が流れた。文久2年7月に流布した孝明天皇毒殺計画の風評は，その最も大きなものだった（『東西評林』第2冊，「京師機密風説」，65頁）。そのほか，10月18日，吉野如意輪堂内にに在る後醍醐天皇の御陵が，「朝五時比より翌暁七時比迄も鳴動仕り」，石の鳥居が倒壊した（『採襍録』第1冊，巻1，10頁以下）という噂，文久3（1863）年1月元旦に「春日若宮社の神鏡事なふしてをのつから四ツに致破砕候由，右は上代にも有例事に而毎兵革之兆に御座候由」（同上第1冊，巻8，281頁），「又同朝多武峯神社之御鏡餅微塵に紛砕いたし候由」（同上第1冊，巻8，282頁）などという風説が，京都の民衆の耳に伝わってきた。その恐怖が未だ去らない1月11日，彼らの面前で，「祇園社之大楠風なふして大枝折候由」（同上第1冊，巻8，282頁）という珍事が起った。その頃の民衆にとって，神仏の異変がただ事でなかったのはいうまでもあるまい。

民衆はこの様な不安からのがれるよりどころを，京都を支配している長州や尊攘派に求めた。薩摩が去った京都において，民衆がとるべき道は，それ以外になかっただろう。また，長州や尊攘激派もそうした人心に投ずるだけの策謀をもっていた。朝廷をかつぐことで幕府も頭が上らないという尊攘派の「実力」が，彼らに対する民衆の信頼を高めたのだった。

では，尊攘派は京の民衆にどのように振舞い，民衆の彼らに対する意識はどのようなものだっ

たのか。

尊攘派の富豪，奸商への強迫による物価引き下げ運動が，民衆の心に投じた第一のものだった。文久2年12月12日の探索書。

当地浪人（尊攘派）之勢ひ盛なる事，先以金銀之相場を定め，判金等者何に程に此末取引可致，米穀之相場者何程，炭薪に至迄何程之直段を以相払可申，若違犯之者有之候はば，速に加誅伐，河原へ梟首せしめ候由等，所々へ落書張紙等仕候者有之恐怖仕，其以来諸物直段も引下げ候事に相聞得候処，公辺より更に御手入之儀も不相聞得，御吟味之程相分兼候事（『官武通紀』第1冊，巻8，228頁）。

尊攘派の豪商への強迫は，このように急激に物価を引き下げ，民衆を喜ばせた。幕府は彼らに手が出せなかった。尊攘派の恩恵をこうむった民衆は，彼らの多少の乱暴も大目に見，「お上」に訴え出たりはしなかった。

右三箇国（薩・長・土）之浪人者不及申，諸国之浪人追々多人数に相成，其中に者窮迫之者有之，市中へ罷越，黄金等強借仕候者も有之候得共，一人として右を訴訟仕候者も無之のみならず，何事も浪人之望に任せ候様子に相見得申候，其子細者京地之全盛に相成候は，全く浪人等之御蔭と相心得，市中に而賞歎仕候者多分に有之候故，少々ノ無理も忍居候様子に御座候（文久2.12，同上第1冊，巻8，227頁）。

文久2年8月，尊攘派を取締るため，幕府は会津藩主松平容保を守護職に任じたが，尊攘激派の勢力は，とても彼の手に及ばなかった。

京都ではこのように民衆に信頼されていた尊攘激派だったが，江戸では『いろは短歌此節浮世の噂』で，「ぬ盗人の昼寝京より数多の浪人」（『幕末史』，395頁）といわれたように，民衆からは嫌らわれていた。

江戸でも京都と同様，尊攘の激派による豪商，貿易商への威嚇が頻発していたが，彼らのなかには多くの偽浪士がまじり，物価の引き下げより，強借など彼らの私欲が表面に出ていた。江戸の民衆に人気のあったのは，新たに京都守護職に任ぜられた会津藩主だった。江戸の民衆は会津が京都の尊攘派を取り締り，彼らの江戸への流出を阻止してくれることを期待していたのである。「よの中に会津殿の出たからは，急度（キット）打ぞよ悪ひあめりか」（同上，409頁），「会津肥後様京都守護職勤めます，内裏繁昌で公家安堵，とこ世の中ようがんしよ」（同上，429頁）。江戸の民衆には，徳川の柱石会津への信頼がまだ失われてはいなかったのだった。

江戸の民衆を脅かしたのは京都から流れ込んだ浪人だけではなかった。幕府が新たに徴募した新徴組や，歩兵組も同様だった。新徴組は文久2年の幕，旗本鵜殿鳩翁の下に幕府が組織した浪人隊であり，歩兵隊は同じく文久2年12月，幕府が旗本に命じて領内の農民を差し出させ，これを歩兵隊に組織したものである。

以上の様に文久2年の民衆は，江戸でも京都でも，好評，不評の別はあったが，尊攘の激派に引きずられて一喜一憂せざるをえなかった。明けて文久3（1863）年も，やはり，民衆は尊攘運動の嵐の中に明け暮れした。京都の民衆はその嵐のなかに身を晒しながら，江戸の民衆は，後に述べるように外国からの直接的な脅威に怯えつつ，その生活を送くらねばならなかった。京都においても，民衆が好意をもっていた尊攘派の名をかたり，民衆から金品を強奪しようとする偽浪士が，この年から出没しはじめた。

文久3年8月の会津藩の探索書は，次の様に述べている。

近来の事にて商人や何やといふ首斬らぬ日はなく，或は火を掛け寺院抔を焼き，或は火を掛るといふ張

紙をなし，人を殺すといふ張紙をなし，人々畏て立退杯いふ騒をなさしめ，従て命乞などすれば，右へ之答書抔出来候事有之，長州様之御屋敷に行きて歎願すれば，右之難を免る杯いふもあり，白昼に数十人集りて，人之屋宅を毀ち，物を盗出し，更に畏るる気色も見えず，人々之心何となく洶々として不安を懐けるは，畢竟新奇なる殺伐之事日々に有之，明日之日は何となるも難計，四民四足を措所なしとは此事なり（『官武通紀』第2冊，巻6，34頁）。

こうした情況のなかを，文久3年3月4日，将軍家茂は尊攘派の強い圧力によって上洛，一橋慶喜や松平春嶽はそれに先立って入洛していた。尊攘派は幕府に攘夷を強制することを目的に，足利尊氏の木像の梟首や，親幕派公卿の侍臣へのテロなどを実践し，幕府最高首脳への威嚇活動を強化した。

この様な京都市中の秩序の崩壊に対し，所司代，町奉行は為すすべを知らず，「当時は所司代町奉行も一縮，変死有之候へば只片付候丈が取扱，依而町奉行所を死骸の片付役所と世に唄申候云々」（文久3.8.6，『東西紀聞』第1冊，巻5，776頁）とさげすまれ，将軍の上洛も，かえって幕府の哀れをとどめるにすぎなかった。

しかし，文久3年の政局は尊攘派の主導の下に，めぐるましく回転した。3月11日，天皇が将軍を従えて攘夷祈願のため賀茂の両神社に参詣したのをはじめ，3月21日には，将軍は朝廷から攘夷決行の期日の決定を迫られ，松平春嶽は朝廷への抗議の意をこめ，総裁職を辞職するという事件も起った。尊攘派は幕府が攘夷期限を決めない時は，倒幕運動を開始する計画をいだいていた。4月11日には，天皇が将軍に攘夷の節刀を授与するため，石清水八幡宮に参拝したが，将軍は病と称して扈従を辞退し，将軍代理の一橋慶喜も途中から姿を消した。節刀の授与は出来なかったのである。この時，京都で「真の御太刀はいらないものよ，どうて攘夷は出来やせぬ」（『幕末史』，478頁）という俗謡が流行した。しかし，朝廷がしばしば攘夷期日の決定を迫った結果，幕府も4月20日には，5月10日迄に攘夷を決行する旨回答せざるをえない破目に追い込まれ，将軍は摂海防禦巡察を名とし，4月21日大阪に向ったのだった。こうした朝廷の将軍いじめは，尊攘派や彼らと結んだ倒幕派の少壮公卿たちの意志で孝明天皇の真意ではなく，天皇はむしろ「下ヨリ出ル叡慮」（『孝明天皇紀』90冊，坂田吉雄『明治維新史』，156頁）に対し，激怒していた。天皇の本心は公武一和の実現にあったのである。

5月10日がきても，勿論，幕府は攘夷せず，将軍は5月11日帰京した。だが，5月10日には長州藩が下関を通る外国艦船を砲撃し，また，江戸では生麦事件をめぐる外交問題が緊迫化してきたので攘夷体制の強化が必要となった。将軍はそれを理由に12月6日天皇の許可をえ，16日に江戸に帰った。8月13日には攘夷親征の詔勅が出され，8月17日，攘夷の尖兵を自称する天誅組が大和で挙兵した。続いて，天皇親征を意味する8月18日の大和行幸が発表され，そして，この行幸を阻止し，長州と尊攘激派を京都から放逐しようと，会津，薩摩が連合して実施したいわゆる8・18のクーデターが勃発したのである。

8月18日以後，尊攘派は京の民衆の眼前から消え去り，これに代って政局の主導権は，島津久光，松平春嶽，山内容堂，松平容保，伊達宗城ら公武合体派雄藩の諸大名と，一橋慶喜など幕閣首脳よりなる参預会議に握られる。

民衆は頼りにしていた尊攘派が，京都から放逐されて頼むべき勢力を失い，大げさにいえば，恐怖の巷に為すすべを失ったのである。8・18以後の京都で，京都の人々の「守護神」たろうと

したのは薩摩だった。

則ち藩士の風を見候に，威力を以町人百姓を凌ぎ，彼を恐れしめ，或は恩賜を施し，歓心を結び，人望を取り，既に此節四条辺之劇場にて，勇士之装束薩風を模候事に至候（文久3.8，『官武通紀』第2冊，巻11，131頁）。

薩摩は民衆に対し，恩威交々用い，威厳と信頼感を人々の心に植えつけようとしていたが，民衆はかつては信頼した薩摩だったとしても，会津と組んで，彼らが好意をよせていた尊攘派を弾圧した後の薩摩の行動には，もはや信を置くことは出来なかった。薩摩に代ってこの年の暮頃から，京都でも一時会津が民衆から慕われるようになる。文久3年11月の『東西紀聞』（第2冊，巻9，424頁以下）の探索書によれば，会津の人気は藩士の統率がよかったこともあるが，何よりもその消費が京都を潤したからだった。

幕末の激しい政治変動期における民衆の「守護神」は，彼らをとりまく政治環境の変化に左右され，民衆は仮に自らの好みがあったとしても，その勢力に固執することはできなかった。薩摩から長州や尊攘派，さらに会津へと，政治的にはそれぞれ明らかに違った立場の勢力に対して，民衆は自らの安心を求めて，次々とはかない希望を托さざるをえなかった。

だが，現実的な安定勢力たると否とに拘らず，京都の民衆は天皇に，江戸や，天下の台所といわれた大阪の民衆は，将軍個人にはほぼ一貫して憧憬の念をいだいていた。ただし，長州征伐などで幕府軍が大阪の民衆に多大の犠牲を強要した時など，さすがに彼らの将軍観も変ったが。

京都の民衆が天皇を目の当り仰ぎ見たのは，文久3年4月，石清水八幡宮へ天皇が参詣した時だった。

行幸拝見近遠国之者夥敷此度ハ御長途故何程群集ニ而も拝見場広ク長ク，併し夫でさへ市宅道傍ニ人充満何レモ神輿之出御之如く難有狩伏拝ミ拍子を打鳴し申候，十日夜中より御先不引切，又十二日夜九ツ時迄御跡引続申候不軽御事也（『東西紀聞』第1冊，巻3，393頁以下）。

恰も神輿に対する如く天皇に柏手を打つ民衆の姿は，何よりも天皇に関する彼らの心情を素直に表現したものだといえる。

江戸における将軍に対する民衆の心情も，京都民衆の天皇にいだく心情と大差はなかった。この年の2月，将軍は上洛のため江戸城を出た。「御歩行に而浜御殿え着　御民之父母たる御形体万民十分ニ奉拝礼歓喜之声溢巷」（同上第1冊，巻2，204頁）。将軍に対する民衆のこの様な心情は，大阪でもよく似ていた。文久3年4月21日，摂海防備体制視察のため，将軍は大阪に滞在した。5月18日の会津藩士の書翰は，「御滞坂中は御模様至而宜敷，一坂中之下々悉く奉泰仰，中に者老人に而幸に長命に及候故，天下様を奉拝，前人之無之事に候杯申落涙に及候由」（『官武通紀』第1冊，巻4，560頁）と将軍に対する大阪民衆の態度を報じている。

さすが京都では将軍に対する憧憬は見られなかった。京都の民衆は攘夷できない将軍を，むしろ軽蔑していた。御所の恩恵を感じ，尊攘派に好意を寄せる彼らには，天皇や尊攘派の望む攘夷を願う感情が強かったのである。

もしも此子が男の子なら尊王攘夷をさせませう。オシヤリコ，オシヤリコ。乞食さへかかる事を申触し候世の中何れにも尊王攘夷無之候而は難相叶義と奉存候（文久3.2，『東西紀聞』第1冊，巻1，137頁）。

これが当時の京都民衆の卒直な感情の一面だったと察せられる。

文久3年の2月には，江戸の民衆は生麦事件の犯人引き渡しと，賠償を求めるイギリスの武力

的脅威に晒らされていた。イギリスはもし幕府がその要求に応じない時には，江戸を砲撃すると恫喝していたのである。この情況の下で，幕府は江戸湾防禦のため，諸藩に藩兵の緊急出動を要請していた。文久3年3月の尾張藩士の書翰は，この緊急要請をうけた尾張家の様子を通じ，次のように江戸の狼狽振りを伝えている。

公辺より御触有之八日ハ武役之面々築地御固として出張今日夫々具足御貸渡相成申候夷国ハ八日本より返答次第ニ而手始は江戸幷近国を焼討可致迚大砲之箇先を当地之方え向構へ罷在御家兵粮米ハ築地御蔵より当屋敷え今明日中に曳届之筈……御年寄衆夜更迄出殿上を下へと難渋市中之町人戈(ナド)ハ遠国之親類戈え逃退キ老若男女愁傷不大方候（同上第1冊，巻2，271頁）。

尾張家では，にわかに家中の婦女子を帰国させることに決し，手足まといになる道具類を附近の道具屋に売り払った。この時の江戸には，かつてのペリー来航当時の事態が再現されたのだった。しかし，3月中の切迫した対英交渉の危機は，5月3日にイギリスの最後通牒に接した幕閣が，償金10万ポンドをイギリスに支払って一応解消した。戦火を恐れて疎開していた民衆も江戸に帰ってきた。

だが，江戸の民衆は，この間の幕府の対英接渉を通じ，幕府に攘夷の勇気がないことを確信した。だから，5月10日が幕府の天皇に約束した攘夷決行ギリギリの日限であることを知っていたにも拘らず，民衆はその日が近ずいても，もはや狼狽しなかった。幕府は非常の場合には，浜御庭で火失十発をうち放って開戦の合図をする旨，江戸市中に通告したが，民衆はこれを冷笑し，「瓢箪（兵端）のひらきはじめは冷（火失）でやり」（『幕末史』，484頁）と茶化す有様だった。

江戸民衆を恐れさせた外圧は軽減したが，将軍を京都に取られたこの年の江戸の治安は乱れていた。イギリス騒ぎの文久3年3月頃，すでに「市中ハ強盗夥敷薄氷之上ニ居候心地ニ御座候」（『東西紀聞』第1冊，巻2，272頁）と，さきの尾張家中の書翰は江戸の無警察状態を報じていたし，4月頃の江戸の有様は，次の探索書が描いている通りだった。

浪人共市中徘徊富家へハ金之無心猥ニ押込乱妨之躰も有之以之外成事ニ候得共御取糺御裁許も無之是ニハ一同惑乱異乱ハ更ニ忘却致シ浪人の跋扈外異醜虜にも増りたる有姿なり（同上第1冊，巻3，405頁）。

かくて，「此節四谷通り大横町辺夜分人出少し，夜店一軒も出し不申至而不景気に御座候」（同上第1冊，巻2，373頁）といわれるように，花のお江戸もこの年の4月には，暗黒の世界に転落したのだった。これらの強盗や浪人の大部分が攘夷資金の調達に名を仮る偽浪士だったのはいうまでもない。しかし，浪士の乱暴は尊攘派を名乗る偽浪士だけではなく，幕府の新徴組に組織された浪人によっても行われた。

浅草御蔵前家持大家幷大伝馬町日本橋辺大家を見込押借申出市中騒敷，右町々渡世一般に相休み皆々昼夜宅々相守狼籍者防方用意而已致し居，何レも驚入昼夜の無差別諸人通行迄も遠慮致し，甚難渋の事に御座候，悪党者名前左に申上候。鵜殿鳩翁，高橋伊勢守，中条金助，此三頭ハ御旗本衆に而先達御上洛の御供被仰付，在京罷在候処，異国騒敷候付俄に此表え罷帰居候由，諸国浪人頭のよし（文久3.4，同上第1冊，巻3，425頁）。

この諸国浪人こそ，新徴組にほかならなかった。将軍不在中の幕府は，いまや自己の統率下にある浪士隊に対してさえ，その無力さを暴露していたのである。

また，浪士隊だけでなく，歩兵組の乱暴も文久3年の秋頃には民衆を泣かすものになっていた。

此度御公儀様ニおゐて御召抱相成候歩兵と申者ハ諸旗本様方之内より千石ニ三人之割を以夫々御領知よ

り御呼出し＝相成右を歩兵組と唱え候て……稽古之暇＝ハ御府内所々遊行致し候処追々我意増長いたし当亥九月十六日夜二番組之歩兵六人連＝而吉原御廓中え入り乱妨致明れハ十七日朝四ツ時頃猿若町三丁目森田座芝居え参り無銭＝而見物いたし，其上酒狂に乗し脇差を抜キ芝居中をあばれ狂ひ見物ハ大キ＝驚キ何れもはだし＝而ほうほうの躰にて銘々の茶やえ逃隠役者も皆々二階三階より飛をり命からから逃出ス……此間＝歩兵ハ見物取落したる紙入きせるかんざしの類をひろい取り懐中致桟敷或ハ土間え残したる酒肴さんざん＝呑食ひセし上往来え出て抜キ身を振廻し犬を切殺し人を追かけ廻り又芝居え入りて舞台を狂ひ廻り……（文久3.9，同上第2冊，巻7，330頁以下）。

幕府直轄の新徴組や歩兵の乱暴狼籍は，江戸民衆がすでに春頃からいだいていた公儀の「御威光弥薄く相成申候」（文久3.4，同上第1冊，巻3，415頁）という感慨をいよいよ深くさせるとともに，民心を幕府から大きく引き離す原因となったにちがいない。

この様に江戸民衆の不安を包みながら，年は文久から元治へと移っていく。元治元（1864）年の春，江戸では民衆の夜の外出の安全を期するため，必ず提灯を持って歩くべしという布令が出た。しかし，民衆はこれを守らず，「てうちんもてとわ御世話のことよ，政事の暗ハどふなさる」（『甲子雑録』第1冊，巻2，214頁）と，この布告を揶揄したのだった。ここに元治年間以後の幕府の運命が予告されていたといっていい。

こうした江戸にくらべて，元治を迎えた京都は，依然として政局の中心だっただけに，社会情勢も慢性的に悪化するというよりも，政局の変動が，その都度，鮮やかなコントラストをなして明暗を分け，民衆の意識を複雑にしていった。元治元年の正月，昨年の6月帰東した将軍は，公武合体の誠意を明示する目的で，再び上洛してきた。この時は，激派が一掃され，公武合体の雰囲気がただよう京都だったので，将軍は公武合体の実現を欲する天皇から優遇されたのだった。公武合体を標榜した参預会議も，新年の政局を安定させるかに思われたのである。将軍に随従した武士たちの間には，こんな歌が流行した。

ありがたや御上落又逢たいとしよ国の人々が花の都へはせのぼりしよ大名さま方もおそろいできんもんさき箱花やかにぎようれつりつぱな都入り。南良（ナラ）と伊勢とへ御幸とは。こらいまれなる太平の。御代の春。四かいなみかぜしずかにて。ごこくみのりにほにほさく。明てうれしい人々きのへ子ィ（同上第1冊，巻2，206頁）。

尊攘派のいない京都に，公武合体派，もしくは幕府の武士たちは太平の幻想をいだいていたのである。だが，こうした武士たちの幻想とかかわりなく，本物の尊浪派が姿を消したのと交替に，京の町には前年の後半期から偽浪士が出没し民衆の日常生活を大きく脅かしていた。この年2月のある書翰は，「近比似せ浪人多く昨夜壱人又暫東之方にても切られ候由，其外押込強盗物之由申候」（同上第1冊，巻2，106頁）と報じている。嵩高いばかりで治安の役に立たない将軍を，京の民衆は「よしにすればいい，再度の上洛」（『官武通紀』第2冊，巻13，「時世悪評」，538頁）と野次っていたが，野次られた将軍は，5月20日江戸に帰った。在京中の将軍や，参預会議が偽浪士の暴行さえ抑え切れないことを知った民衆には，昨年都を追われた長州や尊攘派に対する郷愁がよみがえってきた。

長州　誠つくしてうそじやといわれ
　　今は屋形で一しやん（『幕末史』，532頁）

長州　かわるうき世にかわらぬ心

ほんにおもへば実な人　（同上，533頁）

としま　実も誠も跡からしれる

今に時節があるわいな　長州　（『甲子雑録』第1冊，巻4，508頁）。

この様な長州びいきの心の底には，長州にかけた民衆の攘夷への期待があった。

元治元年の京都の政局は，6月から激動する。6月5日，京都に潜伏していた一部長州藩士を中心とする尊攘派たちを，三条小橋の池田屋に襲った新選組の切り込みと，この事件を本国で知った長州尊攘派の上京，それに続き手兵3000を率いた福原，国司，益田ら長州藩三家老の上京。この長州勢を迎撃しようとする会津，薩摩の連合軍の布陣。かくて，七月に入って両者の間にいわゆる禁門の変が勃発した。

かねがね京都の民衆が，一番恐れていた兵火が現実のものとなり，京都市中の大半が焼け出されたのである。禁門に砲を放った長州は，直ちに逆賊の汚名を着せられ，一橋慶喜を中心とする幕府は，この機会をとらえて一挙に勢力を挽回しようとし，長州征討を奏請した。征討の勅旨が降ったのは7月23日だった。この様な政局の急転は，京都の民衆にとって，まさに光明から暗黒への逆転にほかならなかった。

池田屋事件以後の京都の模様を，或る書翰は次の様に述べていた。

京師も兼而安心之地と 相心得居候処此比之形勢は 大不安心之地ニ 相成何時戦争初り 可申哉何時焼払可申哉不相分土地ニ相極り申候。……平安城門不平安城と相成申候（元治元.6，同上 第1冊，巻5，678頁）。

元治元年7月18日に始まる禁門の変は，21日に終り，長州の敗残兵と三条実美らいわゆる七卿は長州に敗走したが，その間の京都市中の混乱は大変なものだった。「都大火一ツトセぶし」は，その有様を歌った流行（ヘヤリ）歌である。

一ツトセ　人々驚く此大火泣のも哀れナ鯨波（トキノコエ）コノオソロシヤ

二ツトセ　夫婦連やら親子連一命大事と逃て行くミナトモトモニ

三ツトセ　三日三夜サの焼詰ニ長者町から七条までミナヤケダサレ

四ツトセ　欠ママ 離れて町人は家蔵見捨て野や山へミナニゲテユク

五ツトセ　如何なる事かと人々は河原や野山てこやずまいコノアワレサハ

六ツトセ　無性やたらにどんどんと大筒小筒の音計コノヲソロシヤ

七ツトセ　中にも哀れナ産月の大腹かかへて丸焼にコノアワレサハ

八ツトセ　屋敷々々や宮寺も名所古跡も残るなくミナマルヤケニ

九ツトセ　恋しい親子を捨てあはで逃出ス者も有ミナハダシニテ

十トセ　十方（トホー）にくれる人々は遠国他国のしるへまでミナタツテユク

（以下略。同上第2冊，巻7，161頁以下）。

しかし，京都の民衆は，焼け出された後にも，決して長州をば恨まなかった。彼らは禁門の変の真の原因が，長州を弾圧して都から放逐した会津と薩摩にあると考えていたからだった。この年8月中の探索書翰を見よう。

此度之通洛中大騒動に相成候も，会津之処置不宜，薩州之暴行より如斯相成候と申議論紛々，市中迄も皆長州を怨む者は無之，皆会津と薩州と而己に怨は帰し居候事（『官武通紀』第2冊，巻5，316頁）。

一時，守護職会津に，生活擁護の「守護神」たらんことを求めようとした民衆の心情も，会津が薩摩と組んで長州いじめをした事実が明白になるとともに，会津からはなれていった。彼らは「家ほしや，天下ほしや，金ほしや，中川会津の首ほしや，長州様なら来てほしや」（『幕末史』，627頁）という気持さえもっていたのである。「会侯は市中人心居合不申，兎角不容易誹謗相唱居候，御不法之至り御気之毒に有之候。（これに反し）……諸有志は勿論市中一同長州を憐慕仕候」（元治元.8，『官武通紀』第2冊，535頁以下）。この様に京都の人々に慕われていた長州は，今や朝敵，逆賊として，幕府や諸藩によってこっぴどく叩かれようとしている。そのうえ，8月5日，英・仏・蘭・米四国連合艦隊がさきの長州の攘夷に対する報復として下関を砲撃し，長州はかつてない苦境に立たされていた。この長州を討伐しようとする幕府や佐幕諸藩に対する京都民衆の反感は，日増しに激しくなっていったのである。

しかも，戦争は民衆に大きな犠牲を強要する。相手が長州であろうとなかろうと，民衆の反戦意識に変りはなかった。朝廷は7月23日，幕府に長州征討の勅を降し，幕府は翌24日西国21藩に長州征討を発令した。それから約20日たった8月23日，大阪の町人たちは，幕府から百万両の戦費献納を命ぜられたのだった。この時，町人たちは今後此種の献金が，どこまで拡大するか分らないことを憂えざるをえなかったのは当然だろう。この思いは，江戸も京都も同じだった。

ここにおいて，上方町人の反感は，長州征討を命じた将軍その人に直接向けられるようになった。「西国舞」という流行歌は，明らかに将軍を非難の対象にしたものだった。

大樹様といふ人ハ一に異国がふんばりて，二に贋金引請て，三に西国騒き出し，四に世の中の惑乱で，五ツ軍の御評定，六ツ無姓（性）におさへ付，七ツ長門ニしわをよせ，八ツやたらに責寄せて，九ツ国主々々ハ出もせいて，十ヲ徳川治る歟是から先が見たイナア（『甲子雑録』第2冊，巻10，631頁）。

また，京都寺町三条下ル伊勢屋五兵衛の表軒下に，何者とも知れず張紙を出したが，それには「因循かくして醜夷の沓を，ついに大樹が取るであろ」（同上第1冊，巻5，655頁）と書かれていた。

ペリー以来以来，激しい政局の変化に引き廻わされ，心安らぐ時とてなかった京都，大阪，江戸の民衆は，つねに自分たちの生活を保障してくれる安定政権の出現を待ち望み，そして裏切られてきた。そこで，不安に悩み，政治勢力に対する不信の極に陥った三都の民衆にとって，安定政権の理想像は，結局，かつて，祖法を厳守して鎖国を貫徹し，治安を確立して世上の平静を確保してくれていた伝統的な幕府政権本来の在り方へと落ちつかざるをえなかった。こうした祖法復帰の憧れをしめすのが，「献上樽鯛」という酒落である。

浪人故に迷ひ樽　叡慮を止て貰ひ鯛
神君様の定め樽　政事を守て貰ひ鯛
神慮の掟を乱し樽　役人引して貰ひ鯛
万民難渋致し樽　交易止て貰ひ鯛
諸国へ追々返し樽　人質戻して貰ひ鯛
都へ来た事なかつ樽　大名止テ貰ひ鯛（同上第2冊，巻6，8頁）。

あるいは，「日光神祖の定め置れし掟に基キ仁義礼智の政道正しく被成タ事なら万民帰服し五

穀豊かに太平楽をうたふ御代とはなります」（同上第2冊，巻10，625頁）と囃す「ちよぼくれ」もうたわれた。

しかし，民衆は祖法復帰が不可能なこともよく知っていた。民衆の心には，諸悪の根源ともいうべき開国政策や貿易の禁止を，誰に望んでも無駄だという諦めが強かったのである。『官武通紀』の「時世悪評」で，「笑はしやがる　幕府の触書　講武連の姿」（第2冊，巻13，538頁）といわれたのは幕府への不信をしめし，「命しらずめ　交易商人　下ノ関通船」（第2冊，巻13，538頁），「当世たとへかるた」に，「豆腐にかすがい打てもきかぬ　交易する商人」（『甲子雑録』第1冊，巻2，218頁）とあるのは，飽くことを知らぬ利の追求に身を委ねる貿易商人への民衆の諦めをしめしていた。「当世見立貝尽」で，「見込ちがい　鎖港の使節」，「出来まいかい　鎖港」（同上第2冊，巻10，625頁以下）とあるのは，元治元年5月に幕府の使節池田長発らが，横浜鎖港問題をパリで交渉し，7月23日，失敗して帰国，蟄居を命ぜられたことを冷笑したものだった。

民衆はこの様な悲観のどん底で，かすかな安堵の兆を見た。というのは，元治元年11月1日，長州藩が禁門の変の責任者である三家老に自刃を命じ，幕府に恭順の意を表したことで平和がよみがえったからである。民衆は恐れていた大動乱に捲き込まれずにすんだのだった。民衆にとっては，戦争の終結はさし当って，この半年間の重苦しい危機感をやわらげるものとして意味があった。

交易は続き，祖法は回復されないにせよ，平和の訪れは，民衆が何より喜ぶものにちがいなかった。「あら目出たいな目出たいな，鎗は袋に太刀は鞘，納る御代と思しる」（『幕末史』，641頁）とうたわれたのもそのゆえだった。しかし，「物価沸騰だよ　木枯や色あるものは浜の松」（同上，654頁）といわれたように，長州征討の軍費調達は，出兵諸藩の民衆に恐ろしい物価高を残し，「浜の松」以外の世の中を，すべて「木枯」に晒しつつ，元治元年は終ったのである。

第三期　幕府権力崩壊の時期

元治元年11月に降服したはずの長州は，慶応元（1865）年1月以後，高杉晋作ら討幕派の反乱によって内戦情勢に陥り，やがて，討幕派が恭順派を斥けて藩政を掌握し，いわゆる「武備恭順」を唱えていた。

幕府はこれを問責するため，長州藩主父子に江戸へ出頭を命じたが，討幕派で占める藩当局はこれを拒絶した。ここにおいて，幕府は長州再征を決意し，4月1日，将軍進発を発表，ついで，慶応元年4月12日，諸藩に長州再征討の令を発した。将軍は5月16日江戸を出発，京都に着いて参内したのが閏5月22日，大阪城に入ったのは25日だった。

しかし，諸藩は幕府の長州再征を喜ばず，薩摩が先ず出兵を辞退した。せっかく「治る御代」を喜んだ民衆は，この長州再征で，物心ともに大きな傷手をこうむったのである。はじめに犠牲をうけたのは，江戸の町人だった。彼らはまたまた多額の軍費を調達される破目に陥った。そのうえ，戦争の再発は物価高騰となって民衆を圧迫したのである。

米や塩，それに油，豆腐などの食品の値上りだけでなく，「其外絹布木綿之類二三年以前之倍増ニ相成り着物着る事も出来不申候只々着ころしニ致し暮し居申候往々ハ如何成行候哉と案事申候」（『連城紀聞』第1冊，巻3，352頁）と，将軍進発に端を発するインフレーションが取沙汰

されていたころ，5月16日の或る書翰は上記の様に報じていた。「乙丑（慶応元年）五月東都はやり歌」に，「金銀を王に取られて止桂香，角になられて町は飛車々々」（同上第1冊，巻3，386頁）とうたわれるほど，将軍進発は民衆に嫌悪されていたのである。

江戸を急激に襲った今度の物価騰貴が，長州再征によるものであることは，誰の目にも明らかだった。「万民懇願(オヨシナサイ)よ　鴨立や跡濁りけり沢の水　御進発」（『幕末史』，652頁），あるいは「可熟考(ガエナサイ)よ　枝折らぬよふにかりこめ若葉山　長州征伐」（同上，652頁）という酒落は，まさに江戸民衆の切ない願だったといっていい。「慶応と年号かへて御進発，下からよめばおけということ」（同上，664頁）。この狂歌も同じ民衆の気持を伝えるものであろう。「下から」の下が民衆であることはいうまでもあるまい。

長州再征を最も強硬に主張したのが一橋慶喜だったことから，慶喜に対する民衆の非難は一きわきびしかった。

一ツ　一ツ橋望ミハなんじやと問たらハ，天下をツウツクツウツクツ，隠居がツウツクツウツクツ。

三ツ　水戸さんハ忠義を表にかざし置内心ツウツクツウツクツ心底ツウクツウツ（『連城紀聞』第1冊，巻1，384頁以下）。

長州再征が水戸斉昭の実子である慶喜の将軍職ねらいに発すると，民衆は勘ぐったのだった。江戸はすでに述べたように将軍進発を契機に物価が騰り，民衆は生活難に喘いでいた。だが，不思議なことに市中は平穏，「芝居見世物町々寄セ之類も平日之通」（同上第1冊，巻3，565頁）り繁昌していた。

ペリー来航の時，江戸は突如不況に陥り，民衆は「吉原此節御客が苗」，「芝居見物いりが苗」と歌い，文久2年，松平春嶽が幕政改革に乗り出し，参覲交替制を緩和した時も江戸は不景気に襲われ，民衆は「お酒も高くて呑れない。のんでもさつぱりききめがない」と暗い世相に愚痴をこぼしていた。だが，これらの時代は，何れも不景気で盛り場はすたれ，民衆も美味な酒が飲めないと，極めて当りまえの不満を吐露していたにすぎなかった。

ところが，今回はそうではなく，民衆は当りまえの不満の表現では落ちつかなくなっていたのである。不景気で懐中に余裕がないにも拘らず，彼らは盛り場での憂さ晴しが必要だった。民衆は将軍進発というかつてない大きな戦，出口のないトンネルの様な戦争に捲き込まれ，自暴自棄的な心境になっていた。

慶応元年8月の「はんじ物」にも，「東西南北 慶応天下末世愁長」（同上第2冊，巻4，84頁）というのがあり，この「末世」の長き「愁」を忘れようと，彼らの足はおのずと盛り場に向い，民衆は強い刺激に刹那の快楽を貪ろうとしたのだった。この年の9月27日付戯作者柳亭種彦の某宛書翰の一部にも，「東都ハますます花麗驕侈たとへハ陰症の傷寒のやうに而末々安して安心なし」（同上第2冊，巻7，352頁）と書かれていた。この書翰は未来への見通しをもたぬ民衆が，身を享楽に投ずる心理的な病根を，巧みに指摘したものといえる。事実，民衆が安んじて身を托していた徳川封建体制は，この頃から音をたてて崩壊しつつあった。

江戸盛り場の繁昌は，幕府が破滅に突き進むに従って盛んになっていった。慶応2（1866）年10月の或る書翰には，「此表（江戸）不思議成事ハ左に申上候通，諸色日増に高価に相成諸人難渋之中に」，盛り場のみが大繁昌だということだと書かれ，中でも「新宿妓楼江通ふホイ駕籠終夜無絶間候」（『連城漫筆』第1冊，巻4，95頁）という現象が，もっともいぶかしいと述べられ

ていた。

慶応3（1867）年，幕府倒壊の大詰が来た時も，この状態は変らなかった。当時，南京米でさえ，百文に付白米壱合六夕，慶応元年にくらべ約2倍半の高値になっていた。然るに，江戸の遊里，盛り場は「如此諸価沸騰し諸民困窮の中ニ而毎夜新宿の妓楼へ通ふホイ駕籠の声終夜絶間なし芝居角力浄瑠璃軍談講釈場等大入芸妓等東西ニ奔走す」，「遊所場芝居等之繁昌は不思議の其の一ツ也」（慶応3年6月，『丁卯雑拾録』第1冊，巻2，132頁）といわれる有様だった。江戸の民衆は恰も体制の枠外に投げ出されたかの如く，瞬時の快栄の追求に我を忘れようとしていたのだった。

この様な不安と絶望，寄るべない虚無的な心境，それに複雑にからみ合う怒りが，重苦るしく堪え難いまでにその意識の底に沈澱していたのが，慶応年間の江戸の民衆であり，この心の底を流れる意識を盛り場における憂さ晴しが吸収できなくなったとき，民衆の鬱憤は打ちこわしや，「エエジャナイカ」の乱舞となって噴出する。

江戸で見たような逃げ場のない虚無感をともなった，多分に病理的な絶望の意識は，やがて京都，大阪以西の民衆の心にも浸透していく。この民衆の心理状況は，たとえば大阪や播州での迷信的な現象を報じた情報書翰の内容からも察せられよう。

その一は，大阪の出来事で，禁門の変後，取り毀たれた長州屋敷の門前にあった柳の木を「無念柳」と唱え，「是又群集参詣人有之何様制し候而も聞入無之右柳之木を夜中為切取候位之事」（『連城紀聞』第1冊，巻3，421頁以下）だというものである。

その二は，やはり大阪で，千日の墓地へ昨年獄門になった長州藩士5人を埋めてあったが，「其所へ又候群集致し参詣人有之」（同上第1冊，巻3，421頁）というものである。

その三は，播州で押借等をやっていた長州浪人が，遂に捕吏に追つめられ，芦の中で切腹して果てたことがあった。それを村民が憐み石碑を建ててやった。「夫を残念山と唱へ願懸致し候得は，何にても相叶ひ候と申諸人群集致し夥敷事ニ相成候得は，尼ヶ崎領分ニ而領主より品々制し有之候得共中々聞入不申候」（同上第1冊，巻3，420頁）というものである。

これらの書翰は何れも長州再征開始後の慶応元年5月のものだが，この様な迷信的な現象を，この書翰の筆者は「実に何之事やら更に相分り不申，実事とハ思ハれぬ位之事にて，狐狸の所作にても可有之歟，又其起を取置する者なし，唯々長之美名を為唱候策にても可有之と奉存候」（同上第1冊，巻3，421頁）と述べている。たしかに，筆者の推測する様に，長州藩関係者の策謀ということも考えられよう。

だが，より重要な問題は，京都，大阪，それ以西の民衆も，幕府の長州再征による物心両面の深刻な被害で，藁にでもすがりたいという処まで追いつめられ，未来への見通しも持たないまま，無意識的にかつて信頼していた長州や尊攘派に，その心情が傾斜していたということではなかろうか。しかし，以上の現象は，江戸の民衆とちがって上方の民衆には，御所や長州など最後にすがる「守護神」があったことをしめしている。だから，同じ様な病理的な意識に東西の衆民がとらえられていたとしても，そこには自から多少の相違が見られたのである。その違いが，この時期の関西に流れた酒落文にも現われていた。

……米相場ハなでさげない，あげるとさつはりさがらない，しよしきも高くて仕様がない，御酒も高くて呑れない，のんでもさつはりききめがない，どふしてよかろかわからない，是でハ次第々々にくわれな

い（同上第2冊，巻7，348頁）。

この酒落文に見られるのは，文久2（1862）年の晩秋に江戸で流行した「新ないもの尽し」によく似た感覚である。しかし，これは慶応元年の或探索書の「都にての聞きがき」のなかに入っているから，京都のものに間違なかろう。ここでは，かつての江戸の民衆のように，苦境に対する当然の対処の仕方が見られるのである。また，当時の京都では，「西は極楽東ハ地獄，鬼ハ武蔵の原に住，関東附（ズキ）ニハ内征々々」（同上第1冊，巻1，8頁）という歌も歌われていたのだった。

この様な東西民衆のちがいは，江戸民衆の「守護神」である筈の幕府の底が見えていたのに対し，西の民衆にとって，御所や長州の未来が，未知数だったからかも知れない。だが，京都以西の民衆も，「慶の応ずるとしにかわれとも，世をうしとこそ暮す此比」（同上第2冊，巻4，47頁）と嘆息せざるをえない様な絶望的な日々を送っていたことは，江戸の民衆と変らなかった。この関西の民衆をさらに叩きのめしたのが，慶応元年9月に摂海で勃発した外圧だった。

英・仏・蘭・米の4ケ国の公使たちは，9月16日，軍艦9艘を率いて摂津の海に乗り込み，長州親征のため大阪城滞在中の将軍に，兵庫開港の直接交渉を要求するという事件が発生した。幕府は兵庫開港の勅許が得られないまま彼らを説得し，一まず横浜に退去させたが，この騒ぎで様々なデマが飛び，大阪でも民衆の立ち退き騒動が起っている。9月29日の探索書は，兵庫，摂津の状況をこう報じていた。

> 異人明石兵庫辺江上陸一戦ニおよひ候よし，……又説異人上陸猥ニ食店ニ入放食し価を不出サ右ニ付戦ひニ及ひしと云，天保山辺は彼地之乱妨之風説を聞き大ニ懼れ，老幼婦女等を他に送り移し杯いたし候由右に付而歟天保山御固今朝騎馬鎗を携候人数多大坂の町を西へ行候を宿陣の従僕通りかかり見て参り候と申候（同上第2冊，巻4，147頁）。

京阪神の民衆は，この摂海の危機に，何一つ強硬な手段に出ることができず，いたずらに大阪に滞在しているだけの将軍や，長州再征の幕軍に，もはや祖法への復帰はおろか，何ものも期待すべきでないことを，いやというほど知らされたのだった。民衆には長州再征の結末も見えていたのである。この年「夏秋之際大坂はやり歌」のいくつかが，それを教えてくれる。

> 一ツトエイ　人のいやがる交易を済した掃除（部）（井伊直弼）は首がなし　コノ心ヨサ
> 二ツトエイ　深イ計略有様ニ今ニ攘夷もよふせずに　コノ武士でなし
> 三ツトエイ　見てハつよそな陣羽織行ず戻らずうかうかと　コノ人おどし
> 四ツトエイ　よもや西へハ行れまい何しに爰迄うろうろと　コノ卑怯者
> 五ツトエイ　位勢許を高ぶりで異人ニまけたる旗本め　コノ禄盗人
> 六ツトエイ　むやミに町にて宿をかりあれのこれのといぢめ喰　コノどこじきめ
> 七ツトエイ　何に付ても異国をは討ねば天下ハ納らぬ　コノ元を知れ
> 八ツトエイ　やたらに長州征伐といふと神罰あたるぞへ　コノ神知らず（同上第2冊，巻5，181頁）。

こんなすさまじい幕府や幕軍を誹謗する数え歌を，街頭で高唱するものもいた。「右の歌をうたひ歩行し者ハ官より召捕られたりト云」（同上第2冊，巻5，182頁）と，この探索書は朱書している。

明けて慶応2（1866）年6月，幕軍は長州を総攻撃した。しかし，「お江戸から長州ちぢみ買い来た，まけてやらずにうつて（討って）やる」（同上第2冊，巻4，47頁）と茶化されたよう

に，幕軍はいたる処で総崩れとなった。幕府の無力は暴露され，江戸の民衆さえ幕府を完全に見放してしまったのである。

攻める幕府を見捨てたお膝元の民衆に対し，攻められた長州の民衆はどうだったのか。

長州では農工商の民衆は，それぞれ身分に応じ，力に応じて藩士を助け，なかには武士とともに武器をとってこの国難に立ち向う者もいた。彼らは江戸の民衆と鮮やかな対象をなし，きわめて積極的に時局に対応，反幕戦争に挺身していたのである。慶応2年8月，江戸小石川の張紙は，この対蹠的な二つの民衆の意識を次の様に述べていた。

今官軍長賊と戦ひ屢不利なるは，蓋し彼之州中細民[illegible]（食）迄，悉一和一致し，其主の為に一命を捨んと欲するなり。今若江戸に事あらば都下之人民能く政府の難に赴ふもの有るや否や，苟も政府仁政行ひて民をして其上を親しみ，其長に死するを甘ぜしめば則何ぞ長防の服せざるを憂ん（『新聞蒼叢』，268頁）。

長州における民衆の藩当局への協力は，藩当局の撫民政策の成功によるものである。この張紙は，そのような認識のもとに，幕府の対民衆政策を批判したものだった。

幕末期にあっても，この張紙が語っている様に，治者の処置よろしきをえたところでは，長州にかぎらず，民衆は領主の権威に服すという日常的な意識を，まだ失ってはいなかった。民衆の領主からの離反は，彼らの意識の近代的成長の結果だというよりも，多くは藩当局の民衆への態度如何にかかっていた。元治元年の探索書が語る相馬藩の例もそうである。

相馬国政至而宜敷，田地之開墾は七八年前罷通候節より者，已に十倍に相及，唯今にては山野共開墾可致無之程に御座候，尤恤民之典能行れ，春耕秋収，疾病患難，貧民之力不足者を能取糺し相救候由にて，至処百姓共君徳を称歎罷在申候（『官武通記』第2冊，巻13，519頁以下）。

これと反対の場合に，次の様な例がある。

（慶応）二年十月二十日夜，鏡味原竹腰侯用人格塚本新四郎家居不残焼失。同村之窮民より施し頼候処一銭も不出右故焼失致し候処不残見物いたし居候よし（『連城漫筆』第2冊，巻4，107頁）。

これは旗本領の話だろうが，江戸，大阪など天領の民衆は，慶応年間においては，幕府に対しこれと同じ様な意識をいだいていたのではなかろうか。

だが，長州の民衆といえども戦が好きな筈はない。平穏な社会を願う心は，江戸や上方の人々と変らなかった。それゆえ，第二次長州征伐以前には，時には次のような現象も見られたのである。

一の奇談有曰大名並ニ役人ハ勇気有士を引連退キたる後日本の商人及ヒ農民等数多来て敵より奪取たる大砲七八噸なる者を我炮艇へ運ひ入るるを助けたり之を以て考れハ日本の下賤なる者ハ皆異国人を悪むの意なかるべし。日本にて異国人を仇敵也と思ふハ役人及ヒ大名の家来のミ也（『甲子雑録』第3冊，巻12，139頁）。

これは元治元年8月，四国艦隊が長州を砲撃した後の民衆の有様を見た一外国人が，「日本貿易新聞」（第72号）に記載した目撃談である。勿論，当時の民衆に排外意識がなかったという観察は当っていない。そのことは，これまで述べてきたところからも明らかだろう。だから，彼らが外国人を助け，大砲を外国艦に運んだのは決して外国人に対する親和的な感情からだとは思えない。そうではなく，少しでも早く，彼らを自分たちの居住圏から排除したいという排外感情からではなかっただろうか。

この様な長州民衆の日常的な意識は，慶応2年の長州再征の開始とともに急変した。その理由

は，彼らに仁政を施し，彼らの生活の安全を保証する一藩の危機が，家老の犠牲で救える程度のものではなく，藩主そのもののうえに迫ってきたこと，藩主を犠牲にすれば，それは一藩の滅亡を意味し，ひいては彼らの生活の崩壊につながるものにほかならないことを，民衆が感じとったからである。この時の民衆の意識は非日常的な意識であり，日常的な生活の安泰を願う意識とは明らかに次元を異にしていた。

長州で民衆が藩士とともに幕軍と闘っていた時，大阪，兵庫，西宮の町人は，幕府に700万両の軍費を課賦せられていたが，この金はやがて商品に上積され，民衆を苦しめることになる。長州再征以後，阪神の民衆が幕府に反感をいだくようになったのも無理はなかった。事実，大阪以西の地域では，長州征討軍の食料調達によってまたまた米価が高騰し，細民は完全に食えなくなったのである。

ここにおいて，慶応2年5月8日，兵庫の湊川から貧民の打ちこわしが始まり，13日には将軍滞在中の大阪に波及していった。打ちこわしの対象は米商や豪商で，「死人怪我人数不知丸岡侯明石侯御固め御人数操出し厳重に御警衛有之候」と『年間録』（巻15，15頁）は，5月8日の湊川打ちこわしの有様を伝えている。

また，或書翰は13日以後の大阪打ちこわしの模様を，「諸色至而高直ニ而……人数凡壱万人程難渋躰之者大坂中町々米屋へ押入……私共米屋酒屋など見物参候処軍同様ニ御座候右ニ付町中店々不残戸をメ罷在殊之外騒動に御座候」（『連城漫筆』第1冊，巻1，21頁）と述べている。この打ちこわしの首謀者は，7，80人逮捕されたが，吟味に当って彼らは打ちこわしに走った理由を，次の様に答えていた。

> 御吟味御尋之処何連茂米穀を初各別高直ニ而一統暮方に込り候付無拠夫々米屋江無心ニ参り候旨申聞候由夫に付而ハ発徒人可有之候間其発徒人可申上旨御沙汰之処何レも御請ニは其発徒人と申ハ当御城之内ニ御出有之候間御城内御吟味被下候様申上候由（同上第1冊，巻1，22頁以下）。

打ちこわしの原因が，長州再征による物価暴騰にあったことは間違いない。従って，彼らが打ちこわしの張本人を，大阪城中にいる将軍だといい切ったことは正しかった。

打ちこわしは，この年の5月の末には，将軍進発で治安の手うすになった江戸でも頻発した。

> 五月二十八日夜品川宿にて大勢集り物持居宅多く打毀し同二十九日夜芝田町辺数十軒打破り六月二日三日四日頃或ハ四ツ谷辺或ハ下町本所辺所々白昼に横行いたし横浜商ひいたし候者又ハ米店其外富有の町家を打毀し希有なる哉格別大勢にてもなく兎角子供の多く集り来り中に頭分とも相見え十五六歳の男子屋根上を飛が如く縦横自在に奔走頻りに下知を伝へ打毀し又ハ先へ行同様の所業日々夜々流行すと云ども手を束ねて傍観するのみにて制する者ハなし此頃江戸尹の門外に張札あり其文に云「御政事売切申候」と楽書有之と云ふ（『年間録』巻15，15頁裏以下）。

この打ちこわしに少年の一隊が暴れ廻っていたのも変っている。「政治」が「売切れ」た都市，江戸の民衆は，少年の首領を「天狗」と称し，「其者只金子等諸品共一品も持行不申」（慶応 2. 6. 6，『連城漫筆』第1冊，巻1，133頁），ただ奸商の不正を懲らすことだけを目的とするこの一隊の活動に，日頃の憂を散じていたのだった。だが，「此節江戸市中毀候者一人も未召捕相成不申」（同上巻1，133頁）といわれる様に，幕府にこれを弾圧する力はなかった。

大阪では首謀者を召捕って打ちこわしを権力的に鎮圧できたが，江戸で打ちこわしがおさまったのは，町会所から貧民1人について銭一貫文づつを与え，さらに9月には銭100文について，

米2合5勺づつ払下げると予告したからである。

しかし，当時の江戸には米が払底（『新聞薈叢』，61頁）しており，町会所の予告は実現せず，慶応2年秋の江戸には，物乞いの集団が市中を徘徊するという怪現象が発生した。

九月十八日より老幼男女窮民大勢一町毎に集り其町名を記したる紙幟を押立て町々富有の店先に来り大道に伏して曰く米穀ハ不及申物価高直に付困窮の私共今日露命取続き兼無拠御大家様の御助情奉願度旨申演べ大勢歎き居るさま恰も餓鬼の如し（『年間録』巻15，30頁）。

こんな低姿勢の民衆には，幕府も弾圧してみようもなく，やむなく，さきの予告に従って「御救小屋出来其上白米百文ニ付弐合五夕ニ為売渡候」（慶応 2. 9. 27，『連城漫筆』第1冊，巻3，355頁）と無い袖を振らねばならなかったのである。

この様に江戸では子供等による変った打ちこわしに続いて，きわめて変態的な反抗の形態が現われ，その反抗が隠性だったところに，さきに述べた様な慶応年間の江戸民衆の心の底を流れる「末々安んじて安心なし」という虚無的な意識と共通のものがあったといえよう。

だが，彼らといえども，集団乞食にまで落ちぶれざるをえなかった窮極の原因が，開国に始まる社会の動揺，貿易による物価上昇にあることを忘れてはいなかった。慶応2年の9月17日には，上野山下や蔵前で彼ら貧民が外国人数名に集団暴行を加えるという事件が起っている。

湯島上野山下辺迄参り候処貧民大勢処々ニ相集居皆紙の幟を押立町々を横行すかかる所へ夷人五六人乗馬ニ而参り附添人七八人皆騎馬ニ而通り懸り候処貧民共曰ク我々如斯難渋相成し元ハ夷人渡来より諸色高色ニ相成し也とて貧人男女子供迄集来り小石を拾ひつぶてとし夷人江投付る……馬ニ而漸々駈通り蔵前迄参り候処貧民共跡を追ひ慕ひ参り候儘同役共茂見物旁後より参り候処浅草蔵前辺ニ茂大勢集り居此躰を見て前後より集り来り此辺焼跡ニ而瓦山の如く積有を拾ひ取焼瓦を投る……夷人も少々怪我致し漸々逃退候由（同上第1冊，巻3，355頁以下）。

開国を通じ民衆に貧困を強要した外国人に対する強い怨恨は，もはやどうしようもないことを知りつつも，民衆の心底から消え去りはしなかったのである。

江戸の民衆がやり場のない忿懣を外国人にぶっつけていた頃，京都では大きな政変が起っていた。政変は慶応2年7月21日，大阪滞在中の将軍家茂の死去に始まる。一橋慶喜は家茂の遺命によって将軍継嗣に指定され，長州征討軍を統轄することになった。彼は将軍継承を一旦辞退し，将軍の喪を秘して，まず長州征討の解決を急いだ。すでに敗色濃厚となった幕府にとって，将軍の死去は兵を引くまたとなき好機だった。9月には征長総督が広島から大阪に引き上げてきた。長州再征は，結局，幕府にとって全く無益であり，全国の民心を幕府から離反させただけだった。

当時，大阪で「味方負亭主なくなる綿ハなく，天下大変五穀不成就」（同上第1冊，巻3，362頁）と歌われ，民衆は無気味な未来を感得していたし，長州再征の張本人として，民衆から最も嫌らわれていた慶喜が将軍となるという噂が流れるや，大阪では，「とく川に掛そこなった一橋，諫鼓風吹て鳥驚」（同上第1冊，巻3，362頁）という歌が流れ，江戸では「大木をばたをしてかけし一橋，渡るもこわき徳川の末」，或は「二ツ箸持とも喰えぬ世の中に，一ツ橋でも喰なかるらん」（『幕末史』，722頁）などと歌われ，民衆は東西ともに，慶喜に対する嫌悪の情を露骨にしめしていたのだった。その慶喜は12月5日，二条城で将軍宣下を受け，12月25日には孝明天皇の薨去が伝えられた。

明けて慶応3（1867）年正月9日，新帝が践祚，新将軍徳川慶喜も鋭意幕政の改革に乗り出し，

かねて幕府に接近していたフランス公使レオン・ロッシュの指導の下に，老中制度を改め，近代的な内閣制の創出をめざして幕府機構の立て直しを断行し，あわせて陸海軍の近代化と拡張を実施した。それは名実ともに幕府の実力を回復して，西南雄藩を制圧するためだった。この改革は，それゆえ雄藩を刺激して幕府への対抗処置を講ぜしめ，禁門の変以来対立関係にあった薩，長を急速に接近，連合させることになる。両者の間を周旋したのが坂本龍馬だったことは周知のところだろう。

しかも，慶喜の実施した幕府機構の近代化は，江戸民衆の顰蹙を買った。民衆は何事によらず西洋化が嫌いだった。「御城ハさんさい羽織だん袋横浜辺ハ胴服ズボン真の夷人ニ御座候」（『丁卯雑拾録』第1冊，巻1，64頁）と報ぜられる状態に，民衆は適応できなかったのである。

今度の改革に際して，慶喜はその経費を直接民衆に負担させることを遠慮し，万石以下の直参に半知上納の令を出し，幕府は我と我が身を殺(ソ)いで事に当ったのだった。だが，直参への上知令は直参の窮乏を呼び，直参の窮乏は，長州再征による不況からまだ立ち起っていない江戸の民衆に，よりきびしい不景気となってはね返ってきた。

『狂歌当世道外百首 初篇』は，当時の江戸民衆の行き詰った生き方をしめして余りがあろう。

米高し諸色も高き時節には，不二の山程出来る借銭。米代とはしりくらべの手間代は，一ト日休めば追付ハせぬ。算用を立れハとても暮されぬ，無理無算用に渡る世の中。買バ上りし直段には，其度毎にあがる金玉（同上第1冊，巻1，65頁）。

「算用を立て」，計画的に生きていけない様な凄まじい生活苦が，江戸を直撃，そのうえ，治安が悪く，強盗，追剝ぎの危険は依然として去らなかった。慶応3年6月の或る書翰には，「此節夜盗所々え押入或ハ往来逐(ママ)剝等致し甚物騒ニ御座候夜ハ往来無御座候」（同上第1冊，巻2，135頁）と報ぜられている。この様な時勢，生活困難な情勢を放置し，洋風改革に大金を使い捨てる幕府への非難は，遂に江戸城三之丸天主の高塀に，〈幕府に人なし〉という張紙となって張り出された。江戸城の中に幕政非難の張紙が出たのはこれが初めてだった。慶応3年4月10日のことである。

一　国政を重し民を可憐役人有哉

一　家壱人を化ス工夫而己役人有哉（同上第1冊，巻1，76頁）。

幕府は江戸の民衆に嫌悪されながらも，その洋風化の改革を急いでいた。中でも軍事の近代的改革が最も急がれていた。だが，それこそ，何よりも民衆の喜ばぬところだった。慶応3年8月，フランス人将校の指導による軍事調練完成のため，幕府は部分的にはかねて調練場に使用していた駒場野一帯を全面的に農民から強制徴収し，練兵場を建設しようと企てた。だが，この時「百姓共一同」は，「起り立竹鎗抔拵へ役人参り候ハバ打殺可申」（同上第1冊，巻2，235頁）と，幕府に刃向う覚悟を決めていたのである。

洋風が巷に溢れるだけでなく，薩長など雄藩と何時戦端を開くかもわからない極度の緊張をはらんだ慶喜のこの改革に，江戸の民衆は嫌悪の感情に加え，恐怖の心を次第に高めていった。江戸の民衆が，この様に権力の恣意にとりかこまれ，忍従に忍従を重ね，刹那の快楽に身を委ねていたちょうどその頃，横浜，名古屋など東海道一帯の地域にお札(フダ)が降り，「エエジャナイカ」の大衆乱舞が始まった。これらの地方の民衆は，神の加護を喜んだのである。これは恐らく，中部以西に大衆乱舞の大困乱を現出させ，佐幕派諸藩の政治力を麻痺させようとする討幕派策士の策

謀によるものだろう。しかし，このパッとした噂は間もなく江戸に流れてきたのである。

この大衆乱舞は，慶応3年の8月横浜に始り，9月に名古屋，10月上旬に伊勢，中旬から11月にかけて，滋賀，京都，大阪，兵庫に拡がっていった。藁にもすがりたい江戸の民衆がこれをうらやんだのも無理はなかった。江戸では早速，お札の降下と大衆乱舞の模様が，錦絵となって売り出された（同上第1冊，巻3，280頁）。江戸ではお札も，「エエジャナイカ」の乱舞も，翌年の春まで訪れはしなかった。策士が江戸にお札をバラまかなかったのは，江戸の民衆に神仏からさえ見放されたという心理的不安を与えようとしたからではあるまいか。

江戸の人々がどんなにお札の降ることをうらやんだか，10月下旬名古屋に出した或る人の書翰に，「お札様がふと町中大賑合之由目出度御町内もさそさそ大よろこび私事江戸にて委細承り天吉とも地ダンダを踏浦山敷狩居申候」（同上第1冊，巻4，406頁）と述べられていることから，それは知られよう。

この大衆乱舞は女は男装し，男は女装し，老人が娘の小袖を引っかけ，かつらをかぶるなど倒錯的な現象を呈していた。このことは，いかに策士の策謀とはいえ，一種の世紀末的な心理状態が，江戸だけでなく，広く関東，中部，関西地方に慢延していたことを前提にしなければ理解出来ないものだろう。従って，それは人為的，作為的だという点において，また，不健康な心理的背景をもつという点において，江戸中期に爆発した自然発生的な「お蔭参り」の民衆の自己解放の現象とは，明らかに相違していたといえる。それはともかく，この年の江戸の民衆は，遂にお札にまでソッポをむかれたのだった。

お膝下の民衆から嫌悪された慶喜の改革は，すでに述べた様に薩長連合と，幕府との対立を激化した。慶喜は雄藩との緊張緩和の必要を自覚し，莫大な財力を消耗するだけでなく，いたずらに国内困乱を惹起するにすぎないこの改革を諦め，かつての公武合体の基本路線に立ち帰った。そして，名を捨てて実を取るべく，土佐藩の進言を容れ，慶応3年10月14日に大政奉還を断行したのである。将軍職を辞した慶喜は薩・長を抑え，奉還後の新政権の中心に坐る積りだった。だが，薩長や討幕派の公卿は慶喜のこの野望を粉砕すべく，ほぼ同じ日に「討幕の密勅」を獲得し，新政権から慶喜を排除する路線を確立していた。この路線が現実のものとなったのが，12月9日の「王政復古」の大号令であり，天皇政権の実現だった。

大政奉還は江戸の民衆の生活を，以前に倍する困窮に突き落した。なぜなら，これによって幕府の権威が完全に低落し，江戸に治安維持の権力主体がなくなったからである。その結果，無法者は野放しにされ，強盗が激増，さらに統率者を失ってさきの歩兵の横暴が激化したのだった。10月以後，強盗が急激に増加したのは，実は薩摩の西郷隆盛が，江戸薩摩藩邸に多数の浪人を養い，幕府を挑発して討幕戦争の名分をつくるため，或は江戸の治安を攪乱して民心をより一層幕府から離反させるため，その浪人どもに放火，強盗を恣にさせたからである。歩兵は約7000人市中所々に屯集（同上第1冊，巻4，429頁）し，その多くは長州敗戦の帰還者で気性も荒々しく，その乱暴も市中で発砲するなど，手のつけられないものが多かった。

この年の夏頃まで「毎夜妓楼に通うホイ駕籠ひきもきらず」といわれ，民衆の忘我の場だった遊里も，大政奉還後は歩兵の泥靴に蹂躙され，民衆はもはや「悪所」においてさえ，身の置き所を奪われる仕末となった。

歩兵らが蝙蝠傘も見ゆるらん

鳥なきさととなりし吉原

此節の躰相を思ひ遣りうめき出し申候御一笑可被下候（同上第1冊，巻3，346頁）。

今や自分で自分を守る以外，頼るものすべてを失った江戸の民衆は，歩兵の暴行を受けても，以前の様に泣寝入りはしなかった。

今（11月）十三日歩兵多数浅草辺へ徘徊し市店へ立入酒食を貪り横行するに付食物店ハ追々閉戸したり夫より新吉原へ越し弥酒食店へ立入り不法有し故何者か計策を用ゐ偽て其店より引出し喧嘩を仕懸け多人数にて吉原土手所々に於て歩兵を十余人打殺したりしに其歩兵の内より逃帰りたる者有て右一件屯所へ注進したるに歩兵五百人鉄砲を携へ吉原町へ押入砲発したるに付一同恐怖逃去り手向ふ者なかりし其後散々打毀し引取し由（『年間録』巻16，39頁以下）。

この様な無法地帯に生きる江戸の民衆は，幕府の洋式改革や大政奉還によって，花のお江戸を徹底的に破壊した張本人が，何といっても徳川慶喜その人だという印象を拭い去ることはできなかった。この年の秋頃，慶喜を恨む「ちよぼくれ」が歌われたのも無理はない。

慶応三年十月二十一日迄の書付見ねへな，抑々天下は権現様より照徳様迄，連めんつたはりきたりし天下を，今の悪玉（慶喜）なま物智恵めが，あつちこすり，こつちこすりとふとふ天下になりはなつたが，京都は勿論，大名迄も言ふ事聞かない，山城一国とふとふかたられ，それ見ろそれ見ろ手ごちにいかない，へどもどへどもど手めへがかんちの内知（ナイ）恵ふるつて，それそれ親類へ相談もかけずに，天下を京都へかへすとぬかして，おどかし言ふたが，誠となつてぽかんと京都へ天下をあげられ，やれやれどふしたこんたへ，神祖以来の天下をもちやくちや（『幕末史』，763頁）。

江戸の民衆は，一般に鎖国政策の復活を願う全国の民衆のなかでも，とくに祖法の復活という夢をいだき続けてきた。しかし，それは最後に完全に裏切られたのだった。

だが，京都では慶応3年になって，何かしら民衆の心に希望の光が差し込んできた。4月18日に三条大橋に幕府の末路を予言するかの様な落首が張り出された。

角成て王（将軍）は都に詰られて
　歩兵はかりて金銀ハなし
徳川の末にかかりし一ツはし
　すむもにごるも五月雨の比

右之様子にてハ来月ハいずれ何事か差し起り候哉と奉存候（『丁卯雑拾録』第1冊，巻1，85頁）。

果して，この探索書が予言した通り，5月25日には，長防の処分を寛大にせよという勅命が降り，民衆が待ち望んでいた平和が回復するめどがついた。松平春嶽，島津久光，伊達宗城，山内容堂らが入京し，将軍徳川慶喜と二条城で平和回復を協議する。前年7月前将軍死去による長州撤兵以来の問題が，これで解決したのだった。

卯年（慶応3年）五月下旬京師長防御征伐之高札おり候付京師之市人兼而長州贔負有之旁最早太平ニ相成米も下落可致と大悦不斜各信仰之神社仏閣江参詣いたし候由（同上第1冊，巻2，174頁）。

そこへ大政奉還が行われ，10月下旬には，「エエジヤナイカ」の大衆乱舞が始まった。それをみた尾張藩士の紀行文は，京都民衆の喜びを，次の詩で簡潔に描写していた。

市上所見（10月17日）

蹁躚舞態学雲翔　鉦鼓如濤人似狂
都下囂々多喜語　百神感降占祐祥

上（尾張藩主）御着ノ御当日ヨリ所々え格別神降大賑合誠御評判ヨク神徳輝ヲ奉称人気ナリ（同上第1冊，巻3，324頁）。

ついに，11月の京都には徳川家滅亡の落首が現われた。

徳川にかかりし橋の中おれて

さきでつがふかもとでつがふ歟（同上第1冊，巻3，349頁）。

だが，京都民衆のこの喜びも長くは続かなかった。というのは，天皇政権が王政復古の大号令を下した日の翌10日，慶喜の誠意を問うと称して彼に辞官，納地を命じ，これに対して旧幕府の直参や，会津，桑名など佐幕派の諸藩が武力反抗の姿勢を露わにしたからである。

慶応3年12月12日付の京都発の或書翰は，「洛中町々も悉家財道具等取片付婦人子供ハ田舎へ引移り家毎に門を閉変事ニ及候ハバ逃出候覚悟之為躰（テイタラク）ニ御座候諸道具持運四方へ奔走し候有様誠ニ哀成次第ニ御座候」（同上第2冊，巻5，4頁）と町々の情況を語っている。

明けて慶応4（1868）年正月3日，幕軍と薩軍は鳥羽・伏見で衝突した。民衆の憂慮は事実となったのである。だが，薩軍，それに稍おくれて戦闘に参加した長州軍は，緒戦において幕軍を敗退させ，京都の民衆を安堵させた。天皇政権の重鎮である西郷隆盛も，薩摩藩の重役に1月10日，薩長軍を仰ぎ見る京阪の民衆の有様をこう報告していた。

京摂の間(幕府は)余程人心を失ひ居候事にて，今日に至りては伏見辺は兵火の為に焼亡いたし候得共，薩長の兵隊通行毎には，老若男女路頭に出て手を合せて拝を為し，難有々々と申す声のみに御座候（『大西郷全集』巻2，18頁）。

事実，京都では「志摩津土佐さま長門もつよし，立つは御はたの月と日や」（『幕末史』，778頁）と薩，長，土の政府軍は民衆から称賛され，京都での混乱を回避するため，自ら身を引いて大阪に退き，さらに海路江戸へ帰った慶喜には，次の様な嘲笑が送られていた。

逃て帰るに何つよかろう，家来を捨て只一人り，波の船路をたよたよと。

敵きやさほどには追はせぬのに，こちやあはてすぎ海を越へて逃けて来た（同上，776頁）。

京都の民衆はこの薩長軍の戦勝に「世直し」を見いだしたのである。それが本当の「世直し」だったかどうかは，別の問題だろう。幕末激動の15ケ年における民衆の意識と行動の概観を目的とする小稿は，これで一まず筆をおくことにする。

注

1) たとえば，歴史学研究会編『明治維新史研究講座』（昭和33年7月-34年9月，平凡社刊。全6巻）を見よ。

2) 落書，酒落歌類の作者について，『側面観幕末史』は，作者を明確に指摘出来ないが，「坊間卑賤の徒」（4頁）の面白半分に作つたものとは思はれぬといい，全期を通じては幕府の御坊主の手になるものもあるが，幕末期に於ては，「諸藩士や浪士輩」の作が「八分も九分も占めて居るやうに思はれる」（4頁）と述べている。

（本学部教授）